教職大学院 Newsletter No.194

福井大学大学院　福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科 since2008.4　2025.5.2（公開版）

「不易」と「流行」から「不易流行」へ

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学 連合教職開発研究科
副研究科長・教授　清川　亨

スーパーサイエンスハイスクール SSH とスーパーグローバルハイスクール SGH のダブル指定を受け、高志中学校が第 1 期生を受入れて県内公立校初の併設型中高一貫校としてスタートを切った高志高校に、私は平成 27 年度に赴任した。SSH や SGH により生徒は様々な分野の講演を聞く機会に恵まれていた。高志中学校ではふるさと福井に対する誇りとグローバルな視野を持って新しい分野にチャレンジする姿勢を育てる授業として「高志学」があり、10 社リレー講座では県内企業の社長さん方に接する機会を持った。次に勤務した福井県教育庁では、福井県にゆかりがあり、各界で活躍されている方に県内高校で授業をしていただく「ふるさと先生」という事業があり、日本を代表する企業経営者のお話を生徒と共に伺うことができた。その中でトップリーダーから学んだ次世代教育への提言、視座ともいえる次の２つの教えがある。

①根元の太い幹に戻る：「迷ったら、迷わなくても大本の一番太い幹に戻って、自分の取り組みを見つめ直すことが大事」、課題研究を進めるうえで大切なことは何か、との生徒の質問に答えた当時理化学研究所理事長の松本紘氏の言葉である。松本氏の「根元の太い幹に戻る」という言葉は、研究手法のアドバイスを超え、常に原点に立ち返り、自分の取り組みの意義や位置づけを俯瞰的に見つめ直す習慣の重要性を説くものと感じた。

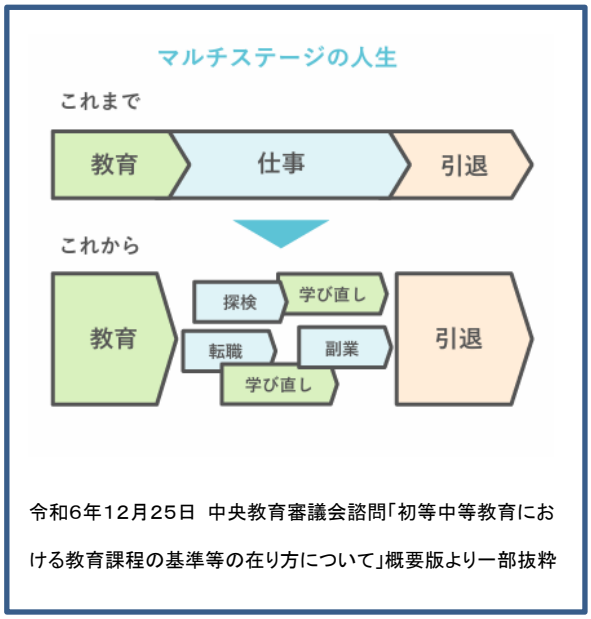
②「時代」の視座：経済界の方々の講演は例外なく「これからの時代はこうなっていく、だから弊社はこのような考えで取り組んでいる」という文脈から始まった。時間軸を伴った大局的な視点を、伊藤忠商事の小林栄三氏は、「目の前の中流の流ればかり見ていないで、上流や下流を想像しないといけない」と表現されたが、彼らの思考と意思決定の基盤となっていることが明らかであった。当時の教育関係の講演や研修会などでは、方法等のハウツー伝達がほとんどで、その方法に至るまでの過程や背景、今後の展望はなかったと記憶している。

また、「ソーシャルセンサ」の概念を世界で初めて提唱した松尾豊氏（現在は東京大学教授でソフトバンクグループ取締役）は、カメラという目を持ったことで今後人工知能は加速度的に進化し、車の自動運転やレントゲン写真の診断などは先の話では

内容

巻頭言 (1)
スタッフ紹介 (4)
院生自己紹介 (12)
特集：国際展開 (30)
書籍の紹介 (34)
令和６年度長期実践研究報告　一覧 (36)
公開研究会 等 (39)

ない（既に実用化されているし、大阪万博では空飛ぶクルマが話題となっている）、目を持った生成系ＡＩ等の今後の飛躍的進化を予測したが、最も重要だったのは、人ができることの自覚が必要という指摘であった。また、「大企業などに就職し、定年までの考えは愚である」という価値観が共有され、当時から研究室の学生全員が起業している事実には衝撃を受けた。



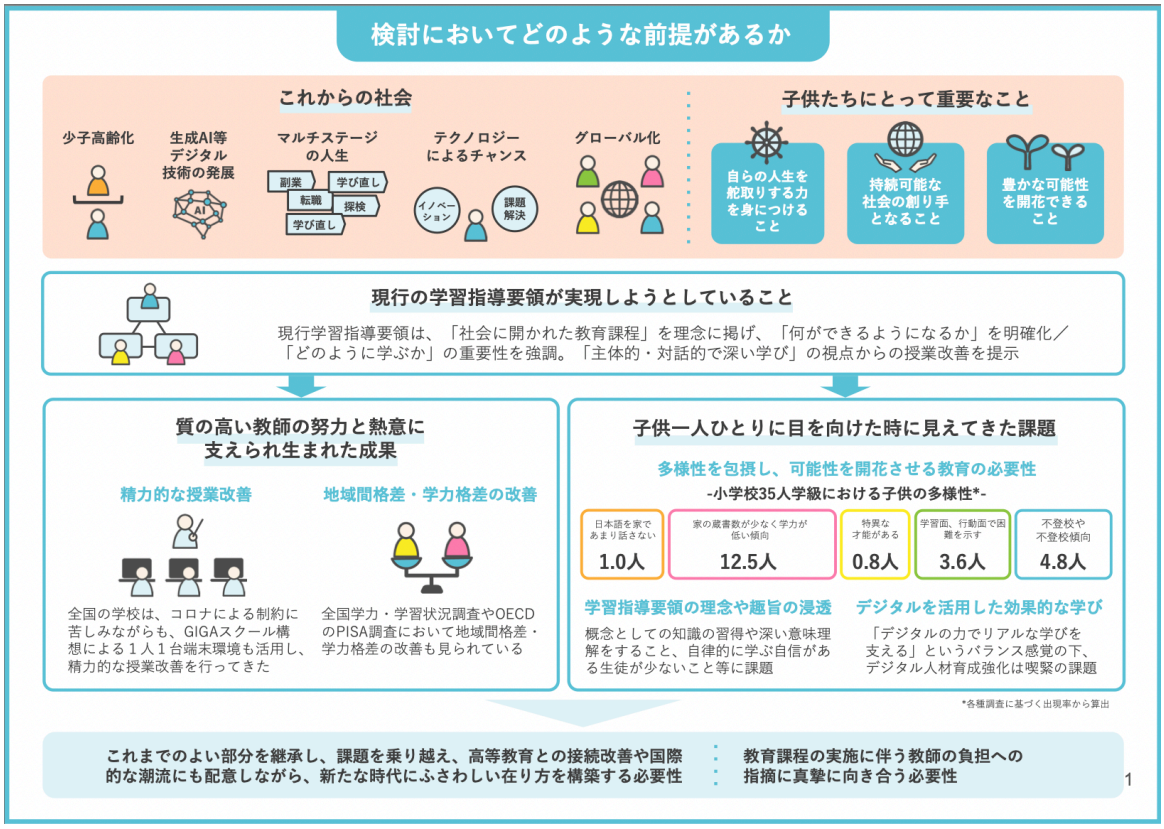
令和6年12月25日 中央教育審議会諮問「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」概要版より一部抜粋

戻るべき大本の幹と時代の視座は不易と流行とも言えるのかもしれない。この不易と流行が教育現場でよく使われるようになったのは、1997 年中央教育審議会答申（二十一世紀を展望した我が国の教育の在り方について）からだと記憶している。同答申では、不易とは「どんなに社会が変化しようとも、時代を超えて変わらない価値のあるもの」であり、流行とは「社会の変化に関心をもち、時代の変化とともに変えていく必要があるもの」と示している。この答申の 5 年前にはバブル崩壊で不況が深刻化し、その 3 年後には阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件があり、世の中は混沌としていた。そのような時代の中で出た答申であり、日本中の多くの学校は、だからこそ目の前の事象に振り回されることなく不易の教育を進めていく必要がある、となった。

不易と流行は 4 字熟語「不易流行」として使われる。三省堂新明解四字熟語辞典によれば、不易流行は【いつまでも変化しない本質的なものを忘れない中にも、新しく変化を重ねているものをも取り入れていくこと。また、新味を求めて変化を重ねていく流行性こそが不易の本質であること。蕉風俳諧の理念の一つ。「不易」はいつまでも変わらないこと。「流行」は時代々々に応じて変化すること。】とある。蕉風俳諧とあるように、不易流行とは、松尾芭蕉が『奥の細道』の旅の間に体得した概念（弟子が書いたものの中に、芭蕉の言葉として残されているようだ）で、俳諧上達の秘訣を聞かれた芭蕉は、「過去の自分に飽きることだ」と答えたそうである。常に努力を重ねつつ、さらに新境地を切り開いていこうとするからこそ、そこに進歩があり、物事の根本・本質により近づけると考えたのであり、「不易を知らざれば基立ち難く、流行を知らざれば風新たに成らず」と説き、不易流行は不易も流行もどちらも大切で、基は一つであるとも述べている。しかし、不易流行は「と」を入れたことで 2 項対立のようになってしまい、学校が大事にしてきた不易の教育は、いつの間にか変わらないことを大切にする文化となり、学校あるいは教員に強く染みつき、21 世紀を四半世紀過ぎた現在でも未だ強く残っている部分があるのではないか。

東京日本橋には老舗の旦那の会がある。とある TV 番組で創業 300 年を越す老舗の旦那衆に、どうしてこれまで潰れずにやってこられたのかを問うた。返ってきたのは、「時代に合わせて変えてきたから」の一言であった。最近よく目や耳にする「研修観の転換」は、学校が不易ではなく不易流行であればそもそも生まれなかった言葉かもしれなと思っている。

VUCA 時代から BANI へと一層不確実な時代に急速に変化しているこの変化の時代だからこそ、松本紘氏が説いた「根元の太い幹に戻る」姿勢と、経済界リーダーたちが示した「時代」を読み解く視座の両方が必要であり、こうした状況下において教育には「不易流行」の精神が重要である。この「不易流行」の精神こそが、激動する未来の教育を切り拓く鍵となるのではないか。



令和6年12月25日　中央教育審議会諮問：初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について　概要版より一部抜粋

追記１：幼稚園から高等学校までの前文が全て同じで、文部科学省の日本の学校教育全体を変えていく意気込みを感じた現行の学習指導要領も既に数年が経過し、昨年 12 月 25 日には中央教育審議会に「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」と「多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成を加速するための方策について」が諮問された。教育課程の諮問の参考資料は 242 枚にもおよび、子供たちを取り巻くこれからの社会の状況、現行学習指導要領の実施状況、顕在化している課題、審議事項関係、関連する最近の動向について等が丁寧にまとめられている。松尾豊氏が語った AI 技術の加速度的進化と人間の役割の再定義は教育のあり方そのものを問い直しているが、AI が人間の多くの職業や機能を代替している時代において、教育は何を目指し、何を教えるべきなのかを念頭に諮問文だけでなく参考資料を含めて不易流行の精神でじっくりと読みたいと私は考えている。

追記２：本教職大学院での学びは、「実践と理論の往還」により実践の中の理論の生成を目指しているが、院生の皆さんは「不易流行」の精神を体得していると考えている。

スタッフ紹介

福井大学連合教職大学院　教授　**観　寿子**（かん　ひさこ）

４月から教職大学院に勤務することになりました観と申します。約 20 年間の小学校担任時代は、「『観察』の『観』という漢字です。みんなことをよく見るのが得意です」と自己紹介していました。白川静先生の「常用字解」が発売されて「観」の字を調べてみたところ、「雚」には神聖な鳥とされていたコウノトリの意味があることを知って「観」の字がより好きになり、高学年を担任した時には「観」の字で名前を書いて意味も伝えていました。ちなみに私の主免は国語です。

その後、小学校から福井県幼児教育支援センター（以後、センターと記載）、福井市学校教育課と異動して、幼児教育や幼児教育と小学校教育の接続、生活科や総合的な学習の時間に関わる仕事を中心にさせていただきました。そして、２年間の小学校の教頭を経て、令和５年度から２年間、福井大学教育学部附属幼稚園に勤務させていただきました。センターへの異動以降、よく幼稚園・認定こども園・保育園（以後、園と記載）や小学校を訪問させていただくようになりました。訪問した時に出会う子どもたちが私の名札を見て「名前なんていうの」と言ってくることが何度もあったので、「朝、『みかん』の『み（実）』を食べてしまったので、今は『かん』という名前なんだよ」と、言葉遊びで名前を伝えることにしました。附属幼稚園に勤務するようになってからは、いっそのこと「みかん先生」と呼んでもらえたらいいのではないかと思い、子どもたちと一緒に遊んでいる時には、自分のことを「みかん先生」と言っていました。２年間でだいぶ浸透して、保護者の方から、「子どもが家でみかん先生と遊んだと言うのだけれど、観副園長先生のことですか」と、逆に質問されるほどでした。異動の時に、子どもたちがオレンジ色の折り紙で作ってくれたみかんや、字が書けるようになってきた子たちがたどたどしい字で書いてくれた「みかんせんせい」の宛名入りの手紙は、宝物です。

さて、私は、小学校担任時代には意識して大事にできていなかったけれど、センターに異動してから意識して大事にするようになったことが三つあります。「過程・プロセス」「学び方を学び活用すること」「分からないからいい」です。考え方が変化した理由は、幼児教育支援センター時代に、働きながら教職大学院に行くことができたことと、幼児期の子どもの姿や幼児教育、生活科・総合的な学習の時間について学ぶことができたからだと思います。三つそれぞれにきっかけとなることがありますが、ここでは、三つ目の「分からないからいい」ということについて書かせていただきたいと思います。

センターでは、主催する園の先生方向けの研修に教職大学院の先生が来てくださっていて、センター職員の私も院生だったので、研修受講生にラウンドテーブルの案内をしようということになりました。しかし、その頃はまだ、園の先生方でラウンドテーブルに行ったことがある人は少なく、ラウンドテーブルの案内チラシのままでは分からないことが多いと思われました。そこで、解説を加えたものをセンターで作成して配信しました。その月の月間カンファレンスで柳澤先生とお話させていただける機会があったので、ラウンドテーブルのチラシは初めての人には分かりにくいと思う、ということをお伝えしました。すると、柳澤先生から「分からないからいいんだよ」という言葉が返ってきました。私はその言葉にとても驚きました。小学校担任時代、どうやったらどの

子も「分かった、できた」となるのか、そのためにどういう授業をしたらいいのかと考えてきたのに、「分からないからいい」ということがあるのだろうかと思いました。私がよほど驚いた顔をしていたからか、柳澤先生は言葉を続けて、「分かると人はそこで考えるのをやめてしまうけれど、分からないから考え続けるんだよね」というような言葉をおっしゃられたと思います。あれから 10 年。いろいろな職場で様々な仕事をさせていただく中で、「分からないからいい」ということへの納得度はどんどん大きくなりました。

大学院に赴任して１週目、ストレートの院生のみなさんとの金曜カンファレンスがありました。事前に院生さんからメールで資料が送られてきて、その中の「おしながき」という資料に「己、観、力、論、試」という５つの漢字が書かれていました。「観」の字があることでより興味をもちながら参加し、M2 の院生さん達が、自分達で考えた１年間の見通しを５つの漢字をもとに話す内容、堂々と話す姿、その両方にとても感動しました。分からないことを仲間と共に考え、大学院のスタッフも流れに巻き込み、１年間、学び実践し成長していきたいというわくわくした気持ちが伝わってきました。私も、大学院で一緒に学んでいけることがとても楽しみになりました。これから、どうぞよろしくお願いします。

連合教職大学院（岐阜聖徳学園大学教育学部）　教授　**龍崎　忠**（りゅうざき ただし）

岐阜聖徳学園大学教育学部に所属しています、龍崎と申します。この度は連合教職大学院でみなさまと一緒に学び合えますことを、本当に楽しみにしています。

珍しい苗字であるのは間違いないかと思います。父方は山口、母方は大分ですが、なぜか生まれも育ちも愛知県であります。そのせいか、「竜」ということで、ものごころついた頃からプロ野球の中日ドラゴンズの大ファンであります。「燃えよドラゴンズ」を耳にすると自然とやる気のスイッチが入りますし、中日新聞も中日スポーツも子どもの頃から毎日欠かさず読んでいます。各選手の応援歌もすべて歌えるくらいであります。今年も本拠地の開幕戦に出かけて大いに応援してきました。近年はもっぱら最下位を争うようなチーム状況で毎度負け試合を観戦に行くようなものでしたが、なんと開幕戦で見事に勝利をおさめ、久々に「応援する」ことのすばらしさを実感したのでありました。

そして、今も自宅の愛知県豊明市（桶狭間の古戦場が近くにあります）から岐阜の勤務先へ自家用車で通うほど、車そのものも運転も好きであります。大学院生の頃に水晶浜と東尋坊を訪れたのが最初の福井体験でありました。その後もドライブとして福井を目指すことが度々で、三方五湖の絶景も永平寺の荘厳さも、北陸に冬の訪れを告げるという雷雲も、とても印象深いです。いずれラウンドテーブルをはじめ福井大学を訪問する機会も増えるでしょうし、ドライブを兼ねて景色と季節を楽しみながら、などと思っています。もちろん越前ならではの、カニもソースカツ丼も忘れてはいけないですね。

福井大学には、大学教員としての駆け出しだったころの 2003 年 12 月に、臨床教育学の科研費の調査で訪問したのが最初でありました。今は仙台に戻られた氏家靖浩先生の導きで、当時の教育地域科学部での教師教育改革の実際を学ぶ機会を得ることができました。柳澤昌一先生とお話しさせていただいた折、「学部生とショーンを原書で読んでいる」というお言葉は、僕には今も忘れられない衝撃と羨望であります。寺岡英男先生、松木健一先生、森透先生はじめ多くの先生方から、教員養成の哲学として「『子どもを育てる』教師を育てる」ことの重要な意味と意義、

そして現職教育として「現場の教師をも支える」ことの使命を学んだように思っています。教員養成とは「応援する」営みだ、と言えるかもしれません。そしてまず何よりも「教師の声を聴く」「子どもの声を聴く」ということが、今も自身が現場と関わる際のモットーのようなものとなっています。

僕自身は、学部生のころからアメリカの教育学者ジョン・デューイに親しんできました。大学院では、当時のデューイ再評価としてアメリカで展開していた社会的構成主義の議論をはじめ、本当に数多く読んで、教育とは何だろうか、学ぶとは何だろうかと考えていました。ドナルド・ショーンの反省的実践家、ジーン・レイヴとエティエンヌ・ウェンガーの正統的周辺参加や実践の共同体、ネル・ノディングズのケアリング、あれこれと夜な夜な少しずつ読んだのを懐かしく思い起こします。その後、今では、縁があって小中学校の道徳教育を中心に授業づくりについて理論的にも実践的にも学ばせていただいたり、保育学や幼児教育学に関心を広げて園の子どもたちと一緒に遊んでみたり、という日々を送っています。卒業して現場に巣立っていったゼミ生たちからも、もちろん現ゼミ生たちはじめ学部の受講生たちからも、多くのヒントを得ています。

そのような毎日のなかで、僕自身がひとりの人間として学び合うことは幸せなことだ、と実感できています。ノディングズが言うように、教育の目的は幸せになることだ、というわけです。そのためには、誰かを応援したり、誰かに応援されていたり、という事実に少なくとも気づくことが出発点になるようにも思っています。そのような幸せをお互いに与える/受け取る場として、この連合教職大学院が機能しているはずだと確信しつつ、その環の中にこれから僕も加われますことを、本当にありがたく、また心からうれしく思っています。

福井大学連合教職大学院　准教授　栃川 正樹（とちかわ まさき）

４月から連合教職大学院の准教授として勤務させていただきます栃川正樹と申します。新採用から５年間は中学校、その後 24 年間は小学校に勤務しておりました。行政職の経験はなく現場一本で勤務してきました。

福井市豊小学校に在職中、豊小学校が前拠点校（現在は福井市中藤小学校）だったことに教職大学院とのご縁を感じ、自ら福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻ミドルリーダー養成コースへの入学を決意しました。この時期に、自分の教員人生が大きく転換していったと振り返ります。「ノックをしなければ、ドアは開かない（未来は拓かない）」。主体的に自ら行動し、挑戦することの大切さを実感しました。それから、早くも１０年以上の年月が経過しました。当時は、学校改革マネジメントコースもなく、国際展開も今ほどではなかったように思います。それが今は、本当にたくさんの院生がいて、スタッフの数も多く、１年間に多くの国の方々とつながっている状況に驚くばかりです。

大学院修了後は、福井大学教育学部附属小学校に勤務することになりました。翌年には、附属中学校とともに附属義務教育学校となりました。福井県内初の義務教育学校として礎を築く大切な時期に勤務するということもあり、大変なこともありましたが、新しいことに挑戦し続ける楽しさも知りました。教諭に始まり、教務主任、主幹教諭、教頭として７年間勤務することになりましたが、年々学校がどんどん大きく発展していく様子を間近で見て感じることができ、幸せな時間を過ごさせていただきました。

また、平成 30 年からの４年間は、教職大学院と附属の兼務という立場を拝命し、合同カンファレンスや夏の集中講義、ラウンドテーブルに関わらせてい

ただきました。その当時は、コロナ禍ということもあり、オンラインでの学びが中心となりました。感染防止のため対面での学びができず、実際に大学に行くことが難しい状況の時期もありました。

その当時、大学の中で訪ねてみたい場所は、コラボレーションホールでした。この４月に着任した時、最初に向かった場所でした。６階から景色も最高でしたが、様々な皆さんと対話してきた様子が次々に頭に浮かび、ここでの学びが今の自分をつくってくれたのだなあという気持ちに駆られました。この場の学びがなければ、今の自分はないと思うと同時に、今後、私のように教職大学院での学びが後の財産となるように、微力ながら院生を支えていきたいと気持ちが高ぶりました。

附属義務教育学校で２年間の教頭、その後、福井市清水西小学校でさらに２年間と４年間の教頭職の経験があります。どんな管理職が理想的なのか、本当に毎日模索しながら過ごしてきた経験をもとに、学校改革マネジメントコースの方々と一緒によりよい学校組織づくりについて、考えていきたいと思います。

附属義務教育学校では、インターンシップで来ていた授業研究・教職専門性開発コースの方々との関わりがたくさんありました。その学びを支えるために、時間割の中にインターンカンファレンスという時間も設けました。昨年も公立学校で、新採用教員の校内研修コーディネーターとしての役割がありました。新卒の先生がどんなことに戸惑い、どんなサポートができるのかも考えてきました。４月からは大学で、金曜カンファレンスなどで、授業研究・教職専門性開発コースの方々とも、ともに学べることを楽しみにしています。先日、初めて金曜カンファレンスに参加しましたが、主体的に会を運営している姿に感動しました。

学校の中核となるミドルリーダー養成コースの方々は、勤務校における研究体制や授業実践の改善への挑戦や学校における諸問題等についてが、研究テーマとなるかと思います。自身の研究主任としての経験や学校現場にいた時の実践と照らし合わせながら、ともに学んでいければと思います。

すべてのコースの皆さんとつながり、理論と実践を往還し、ともに学んでいければと思います。皆さん、挑戦（チャレンジ）することに挑戦（チャレンジ）していきましょう。これから、どうぞよろしくお願いいたします。

福井大学連合教職大学院　非常勤講師　永廣　裕子（ながひろ　ゆうこ）

この度、福井大学連合教職大学院で勤務させていただくことになりました永廣裕子と申します。これまで 37 年間、小学校や中学校で教職に携わり、今年３月に福井市大東中学校の校長を退職いたしました。

私が大学を卒業して初めて赴任したのは、越前市の武生第三中学校でした。学級担任や部活動顧問など初めて経験することばかりで戸惑いながらも、子どもたちと向き合い「その子にとって何が一番良いのか」を考え、心に寄り添うことの大切さを学びました。その後、福井市内の中学校を複数経験し、生徒を中心に据えた学級経営や学年経営に尽力しました。道徳や総合的な学習の時間においては、学校全体の活性化につながる取り組みに力を注ぎ、理科の授業では「子どもの問いを大切にし、協働で探究する授業」を目指して授業研究に取り組みました。

福井大学教育地域科学部附属中学校在任中には、教職大学院にも通いながら学校組織や学校改革について学びを深めました。福井市社西小学校で教頭と

して勤務した際には、子どもたちだけでなく教職員も尊重しながら話を聴き、チームの活力を引き出す組織づくりに努めました。また、大雪など自然災害への対応を通して危機管理について学び、経験を重ねることができました。その後、副校長として福井大学教育学部附属義務教育学校に勤務し、学校改革や研究を柱とした組織体制の構築に取り組みました。そして、令和 3 年度からは校長として「生徒が主体的に活動できる学校」「行きも帰りもワクワクする学びが楽しい学校」「教職員がやる気を持ち、高め合える組織」を目指しながら、キャリア教育や授業改革に取り組みました。保護者や地域の方々と信頼関係を築きながら、学校づくりに取り組めたことは、大変幸せな経験でした。

教員人生の最後となった昨年度は、生徒や教職員とともに学校で過ごす喜びと幸せを深く感じる日々が続きました。夕暮れ時に部活動に励む生徒の姿、文化祭や体育祭で互いに高め合い成長する姿、合唱祭での心のこもった温かいハーモニー、そして授業に向き合う真剣なまなざしなど…。学校で過ごしたすべてが感動する素晴らしい光景でした。同時に、夢と希望を抱いて成長していく子どもたちに寄り添い、ともに歩んだ日々に「何て幸せだったのだろう」と改めて実感しました。

振り返ると、若い頃は情熱だけで子どもたちに向き合っていましたが、経験を重ねる中で視野が広がり、自分自身の内面も変化してきました。それでも悩みは尽きず、教員としてのあり方を模索する日々が続きました。そのような中で教職を続けられたのは、子どもたちからもらった多くの感動や喜び、保護者、地域の方々、そして同僚の支えがあったからです。すべての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

近年、子どもたちを取り巻く環境は目まぐるしく変化しています。学校の課題も山積みであり、前例踏襲や様子見は選択肢にないと言っても過言ではありません。それでも、子どもたちが希望を抱き、明るい未来を夢見て人生を歩もうとする姿は昔も今も変わりません。この子どもたちが未来を力強く切り拓いていくためには、学校教育の質、多様性、そして包摂性をさらに高めることが重要だと考えています。まずは、一人一人の子どもたちの可能性を引き出すために「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現する授業改革、そしてそれを支える学校組織の構築が必要だと感じています。

福井大学連合教職大学院では、これまでの経験を生かしながら、院生の皆さんとともに、教員の資質や能力の向上、学校内のマネジメントのあり方、授業改革、校内研修の活性化などについて語り合いながら、寄り添っていきたいと思います。また、「誰一人取り残さない授業」の実現に向けて努め、「すべての子ども、教職員、保護者、地域の方々が幸せを感じられる学校」を一つでも多く増やしていけるように、ともに学び、成長を続けてまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

福井大学連合教職大学院 コーディネートリサーチャー　千葉 美奈子（ちば みなこ）

はじめまして。今年度より東京サテライト校コーディネートリサーチャーとして勤務致します千葉美奈子と申します。大学卒業後、東京都の私立の中高一貫校、川崎の公立中学校での勤務を経て国立東京大学附属中等教育学校で16年間教鞭を執ってまいりました。私立のカトリック系中高一貫の女子校にて１年勤務したのち、現任校の東京学芸大学附属高等学校に勤務して３年目となります。また、２年前に本教職大学院のミドルリーダー養成コースを修了いたしました。

私からは、１．帰国子女の修了生として、２．国立での教員として、３．今後の抱負の３点について紹

介し、自己紹介とさせていただきます。

まず初めに私の教育観の土台となっている、小中高時代に受けた学校教育についてお話いたします。私は父親の仕事の関係で、小学校 2 年生から高校を卒業するまで、アメリカのロサンゼルス郊外で過ごしました。したがって、このアメリカで受けた教育が今の私の教育観の土台になっています。授業では、答えのない問いに対して周りのクラスメイトと協働し、教師と共にクラス全体で学び合うことが多くありました。現在展開されている日本での探究学習はまさにアメリカでの受けてきた教育の手法に似ている部分があります。

昨年 2 月の福井ラウンドテーブルでは、海外出身の方々と同じグループになり、報告者として１年間運営委員として関わらせていただいた特別支援学校の肢体不自由の子どもたちの探究学習のプロジェクトについて語る機会をいただきました。その後、院生の方々のラウンドテーブルの省察が 3 月のニュースレターに掲載されました。そこには私が報告者だったグループの聞き手として参加されていたパキスタン出身の Aisha さんの報告がありました。Aisha さんは私の報告を聞き、探究学習の授業の一つにあった離島の普通学級の子どもたちとの交流について、インクルーシブ教育の観点から自国の教育の在り方と比較し、ラウンドテーブル後もさらに見解を深められていました。彼女のニュースレターを読み、改めてその探究プロジェクトの普遍的で世界にも通用する教育的な価値を再確認することが出来たことをありがたく思いました。

次に、国立東京大学教育学部附属学校（以後略して東大附属）での経験について紹介します。東大附属には、当時東京大学教育学部長だった佐藤学先生の「学びの共同体」の理論及び授業方法が導入された年に勤務し始めました。全教職員が参加する授業公開では、佐藤先生がコメンテーターを務められ、学びの作法について一つ一つ丁寧に教わりました。検討会は、教師の教え方に焦点をおくのではなく、生徒たちの学び合いの様子を中心に教員間で話し合う手法で、この方法は当時としては目新しいものでした。全教員が生徒一人一人の学びの様子を共有し、学び合うことで、教師の生徒の見方が変わり、授業が変わり、生徒が変わり、学校全体が変わっていく変化を体感しました。

また、東大附属では、日ごろの授業研究だけでなく、様々な教育分野における研究を行う機会がありました。文部科学省の教育研究開発事業や東京大学大学院教育学研究科附属教育高度化センターとの共同研究及び本校創立時から続く双生児研究に携わる機会がありました。コロナ渦で開催された公開研究会の運営委員長を務めたときは、今までの当たり前を問い直し、新たな研究会の形式を、先生方と議論を重ねながら作り上げ、全国の先生方が参加できるようオンラインとオンサイトの先生方が協議し合える開催形式を実施しました。

コーディネートリサーチャーとして、これらの経験を活かし、理論と実践を往還し、新たなる教育実践に結び付けたいと思っています。

最後に今後の抱負について述べたいと思います。３年前、ミドルリーダー養成コースの院生としての目標は生徒を見取る力を養い、長期的な視点に立って自分の実践を価値づけ、将来の展望を探ることでした。そして今、修了生のコーディネートリサーチャーとして、院生の方々の学びを共に伴走し、新たなる学びへの展望が開けることを楽しみにしています。どうぞよろしくお願い致します。

福井大学連合教職大学院 コーディネートリサーチャー　本村 税（もとむら みつぐ）

今年度より、福井大学連合教職大学院にコーディネートリサーチャー（CR）としてお世話になります本村税と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

現在、沖縄県教育庁義務教育課で指導主事の職につきながら、CR として携わらせていただきます。今年度で、教育行政としてのキャリアが 4 年目を迎えますが、その前は中学校理科の教師として、学校現場で多くの学びと経験を積ませていただきました。

私の教師としての生活拠点は沖縄県の離島である宮古島、そしてさらに小さな離島の私自身の生まれ故郷である多良間島にありました。私自身が幼少の時から豊かな自然とさまざまな生き物と触れ合いの中で育ったことは、のちの教師としての自身に大きな信念をもたらせました。興味や関心こそが学びの原点であるという考えは今も変わらず抱き続けています。自然との触れ合い、さまざまな体験活動を授業や学習活動に盛り込むことで子供達から湧き出る好奇心や関心を引き出すことに最大の力を注いだ教師生活でした。

沖縄の小さな離島の教師として、自分自身が「井の中の蛙」になってしまっているのではないかと悶々としていた頃、福井大学連合教職大学院と出会いました。2022 年の春、院生として大学院への入学が決まり、学校でどのような実践を研究していこうかと夢を膨らましていた最中、管理職への昇任と、教育行政として教育事務所への異動が決まったのでした。まさに盆と正月と誕生日が一挙に押し寄せた感覚だったことを覚えています。慣れない環境で、年度はじめは期待など微塵もなく不安しかない中でしたが、私自身の最大の武器である「なんくるないさ（沖縄の方言で「なんとかなるさ」）」精神、そして職場の先輩指導主事たちの後押しがその危機的状況を乗り越えさせてくれたのでした。

カンファレンスやラウンドテーブルを通して、経験や立場などの異なる様々なキャリアの方との交流は、その方々の教育実践の具体はもちろん、そのときの心情、そして何よりも今現在その実践を振り返って本人が感じていることなどを話し、聞き合う場として、擬似的ではあるが体験することを可能にしていました。目を輝かせながら生き生きと実践報告を話す姿から、その場にいた子供達の様子と成長を感じ取ることができたとともに、多種多様な実践を共有することがもたらす大きな可能性を感じた瞬間でした。また、「こんなに一生懸命になって学び続ける先生だからこそ、きっと子供達も一緒になってたくさん学び、大きく成長できたのだろう。自分もそんな先生のように…」という憧れに似た思いを抱くとともに、自分自身がそのような素晴らしい実践を重ねてきた先生方と対話できるという環境はまた、自身を触発させるものでもありました。CR として、そのような活動に再度関われることは今後の最大の楽しみとして期待せずにはいられません。

院生として教職大学院での学びを自らの日々の業務に反映させ、まさに理論と実践を往還させながら取り組んだ実践研究は、私のみならず、所属する組織にも大きな影響を与えたと自負しています。教育事務所の主な業務である教職員研修について、現状の課題や今後の研修のあり方などを指導主事全員で議論を重ねながら見直し、学校に伴走し自走を促すという教育事務所の方針や研修会の計画を立てられたことは何にも変え難い貴重な経験であり、研究成果となりました。もちろん、これは私一人の力では達成できないことであり、個々が関わり合い、全体にうねりを生み出し、協働・学習する組織へと変革していく過程を共に歩んだ指導主事の方々に対しては、今でも感謝が尽きません。福井大学教職大学院の拠点校方式といった特色ある学びの壮大さを実感した２年間でした。

今後は院生としてではなく、あくまでも教員の立場で関わっていくことになりますが、「学びの相似形」を実践すべく、私自身も学び続ける姿勢で臨みたいと思っています。多くの院生の皆さまにとって実りある実践研究が進められるよう精一杯サポートしていきたいと思っています。

「井の中の蛙」だった私自身が全国各地から院生が集まる福井大学連合教職大学院の CR として、今回ご縁があったことに心より感謝いたします。

「井の中の蛙大海を知らず　されど空の青さを知る」

かつての私と同様の思いから入学を決めた院生もおられるかと思います。多少ニュアンスは違うかもしれませんが「井の中の蛙」だったからこそ「空の青さ（深い知識や知見）」を得る環境に立つことができているのかもしれないと感じるこの頃です。どうぞよろしくお願いいたします。

連合教職大学院（岐阜聖徳学園大学教育学部 専任講師）コーディネートリサーチャー

西脇 幸太（にしわき こうた）

2025 年度よりコーディネートリサーチャーとしてお世話になっております。皆様と共に学ぶことができ、大変光栄に存じます。私は岐阜県の公立高等学校で 11 年間、そして愛知県小牧市にある愛知文教大学で 5 年間勤務した後、2024 年 4 月より岐阜聖徳学園大学教育学部でお世話になっています。

専門は英語学で、現代英語の語法・文法を研究しています。英語の実態を丹念に観察し、既存の文法書や辞書には十分に記載されていない用法を正確に記述することを目指しています。具体的には、現在は、現代英語における動詞の目的語省略に関わる現象を対象に研究を進めています。また、研究の道具として「コーパス」と呼ばれる、コンピュータで処理可能な大規模な言語資料を使用することもあります。コーパスは、単語と単語の相性や、ある語の文中での使用頻度や表現のパターンを分析する上で非常に有効です。さらに、英語学の分野で得られた研究成果を英語教育に応用することにも強い関心を持っています。特に、文法指導における効果的なアプローチの開発に力を注いでいます。最近では、高校生用英語教科書（科目「論理・表現Ⅱ・Ⅲ」）の執筆にも携わりました。英語学と英語教育は同じ英語を扱っていても、さらに連携が可能な部分が多く残っていると考えています。英語学の立場から、実践的な指導方法の改善にも貢献したいと考えています。

本務校の岐阜聖徳学園大学では、主に「中等教科教育法Ⅰ～Ⅳ（英語）」と「英文法概説Ⅰ・Ⅱ」という授業を担当しています。「中等教科教育法Ⅰ～Ⅳ（英語）」では、コミュニケーション能力の育成に資する英語授業運営の基礎力を身につけることを目的とし、発音指導・語彙指導・文法指導、4 技能 5 領域および技能統合型の言語活動、評価など、英語教育に関わるさまざまな分野を教えています。「英文法概説Ⅰ・Ⅱ」では、近年の英語学研究を踏まえ、現代英語を語法・文法の観点から分析する力を養います。また、学習指導要領に基づき、言語材料を適切に指導できる基礎力をつけることも大切にしています。高等学校での勤務や教科書執筆の経験を活かしながら、理論と実践の調和の取れた授業展開を目指しています。

ゼミでは、英語学・英語教育の分野で学生の関心に応じて個人研究のテーマを設定しています。より良い英語の授業を行うためには、英語という言語をよ

く知ることが必要不可欠である、という考えのもと、効果的な教え方の追求のみならず、英語そのものの深い理解にも重きを置いています。具体的な内容としては、文献レビューや個人の研究テーマに関わる発表の他、模擬授業を行い、より実践的な観点から英語の授業を分析することもあります。ゼミを通して、先行研究を批判的に検討し、自身の考えを論理的に発表できる力を養うことを目的としています。また、私のゼミでは、学生の主体性を大切にしています。与えられた課題をただこなすのではなく、自ら課題を設定し、その解決方法を考え、論理的に発信する力を養ってほしいと考えています。研究テーマの例としては、現代英語の語法文法に関わるもの（既存の辞書や文法書における記述の不備を指摘し、より良い記述を行うこと）や、中学校・高等学校での英語授業に関わること（4 技能 5 領域の力を伸ばす効果的な言語活動を考案すること）などが挙げられます。

骨太の英語教育を実践するためには、「教わったように教える」という考えを見直す必要があります。時代の要請に応じて変わること（流行）と、変えないこと（不易）のバランスを意識し、変化の激しい時代に、我々は何ができるかを、英語学・英語教育の観点から考えております。皆様の研究の進展に少しでもお役に立てるように精進します。どうぞよろしくお願いします。

（本紹介文は、岐阜聖徳学園大学ホームカミングデーのために執筆した西脇の紹介文、及び岐阜聖徳学園大学ウェブサイトに掲載されている西脇ゼミの紹介文に加筆し、再構成したものです。）

院生自己紹介

授業研究・教職専門性開発コース 1 年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

青木　駿太（あおき　しゅんた）

はじめまして。今年度より授業研究・教職専門性開発コースに入学しました青木駿太と申します。昨年度までは福井大学教育学部初等教育コース小学校教育サブコースに所属していました。小学校一種、中学校一種（数学）、高等学校一種（数学）の教員免許状を取得しています。大学では、算数・数学教育を中心に学んできました。

私にとって教師は身近な職業であり、なりたい職業の一つでした。そんな教師を目指したきっかけは小学校の恩師に憧れを抱いたことです。他者と協働し、自分自身で考えることの大切さを教えていただき、私の目指す教育観の一つになっています。

幼い頃から興味や疑問に感じたことを追求しているような、何でも興味を持つ子どもでした。小・中学生の時は算数・数学があまり得意ではなく、特に好きということもありませんでした。しかし、高校生で数学を学んだときに、小学校や中学校で学んだ内容がより深く理解でき、学び直したことで算数・数学の面白さを感じるようになりました。大学入学に際しては、算数・数学の面白さや楽しさを伝えたいと思い、算数・数学を専門として学びたいと考えるようになりました。一方で、算数・数学に関する高度な内容や知識に欠けていることを実感しており、積極的に大学数学を学んできました。卒業研究では、算数・数学が好きではなかった要因である、立体図形・空間図形

に関して研究を行いました。私は勉強が大好きというわけではなく、得意でもありませんでした。そのため、勉強や学校などに苦手意識を持つ子どもたちに寄り添い、少しでも楽しいと感じることができる教育を目指したいと考えています。また、これまでの経験から、「分からない」ことが分かる、好きではなかったからこそ持つ視点から、算数・数学などの教育を考えていきたいと思います。

教職大学院での目標は、疑問や気付きから生まれる活動や授業を観察し、子どもたちを支える中で気付きをどのように与え、学びの機会を提供できるのかを考えることです。大学では、実習やインターンシップなど短期的に学校に入り、授業を観察したり、子どもたちと関わったりする機会がありました。実習では、先生方の授業技能や様子に着目するばかりで、子どもたちの様子や学びを見取ることが出来ませんでした。授業の主体は子どもたちであり、子どもの学びや様子を見取ることの重要性と難しさを実感しました。授業等を考える中で、主体的な学びと探究的な学びの根底には疑問があることが重要であると考えるようになりました。どのように疑問を子どもから引き出し、持たせるのかということが学びの中では重要であると思いました。これまでの経験から、子どもを見取るということや子どもが主体となる授業づくりなどが課題点だと考えています。そこで、長期インターンシップを通して子どもを見取る力を高めていきたいです。また、一年間を通したインターンシップによって、子どもたちの長期的な成長を見取ることができるようになりたいと思います。探究的な学びや主体的な学びでの教師は支援者や伴走者と呼ばれるように、教え込むことが無く、子どもたちと同じ立場、目線で学びを支えていくことが必要であります。長期インターンシップでは、先生方がどのような関わり方や工夫で「主体的な学びを支援する伴走者」となっているのかを学びたいです。

私自身の目標とする教師像は、子どもたちだけではなく、先生方や保護者の方など周りの方からも信頼される教師です。授業が上手なことや子どもと上手に関わるためにも、まずは信頼関係を構築できるようにしたいです。そして、子どもたちから信頼され、子どもの見取りから授業等を改善していくことができる教師を目指します。学校の中には信頼関係が必要な場面が多々あり、まずはその第一歩を教職大学院のインターンシップやカンファレンス等を通して、理論と実践の両面から見つめていきたいと思います。また、これまでよりも疑問や分からない点を積極的に追求し、少しでも有意義な2年間にしたいと思います。教職大学院やインターン配属校の先生方などにはたくさんのご迷惑をおかけすることがあると思いますが、お力添えいただけると幸いです。これから 2 年間よろしくお願いします。

授業研究・教職専門性開発コース１年/福井県立高志高等学校

市川　温都（いちかわ はると）

初めまして、今年度より、福井大学連合教職大学院授業研究・教職専門性開発コースに入学しました、市川温都と申します。昨年度までは福井大学工学部物質・生命化学科に所属しており、化学を専攻していました。取得済みの免許は高等学校一種（理科）です。

福井大学工学部では「構造依存性を考慮したゲル化反応モデルの提案」という卒業論文を書かせて頂きました。内容としては、高分子化学で、成長過程中のネットワーク高分子の（ビニル／ジビニルモノマーのラジカル共重合反応）大きさ／構造依存性を考慮した新しい架構造形成モデルについて研究・考察していきました。ここでの学びを教師になった時に活かすことができたらよいなと考えております。

私は工学部の経験を活かしてエンジニアになるか、教師になるか迷っていた時に、教師になりたいと強く思うきっかけになったのが、学習塾やフリースク

ールという場所での生徒たちとの交流です。

「個」の価値観を主観的に客観的に理解することは非常に難しく、塾やフリースクールで接してきた生徒たちは似たような性格でも細部はまったく異なっていました。私が小学生の頃は、自主性が全くなく、意欲に欠けていました。そのときに自分を支えてくれたのが「教師」という存在でした。私が喧嘩をしたとき、私が勉学に悩むとき、私が苦悩を抱える時に、私を助けてくれたのが教師でした。

私は、一人一人に寄り添える教師を目指しています。そのために、教職大学院にて、さらなる自己のグレードアップと知見を深めていきたいと考えています。また、私は特にインクルーシブ教育に興味を持っています。現代の日本においては、多様化が進められてきており、それに沿った教員の質というもののレベルも上がってきていると私は考えています。しかし、教員の数が減少してきており、教育現場の負担が増えているのが現状です。

そこで、私は教師になれば次のことを意識して励みたいと考えています。「現代の教育理念に沿って、一人一人が、協力し合って切磋琢磨しあう、という環境整備を行う」。教職大学院では、授業研究やインターンシップなど様々な活動を通して、勉強の楽しさや面白さを伝えるための効果的な指導方法を模索していき、また、教育実習での経験を通じて得た知見を生かし、現場での実践力を高めていくことも重要だと考えています。教育実践からでしか得られない経験や対応力はしっかり身に着けていければと思います。計画、実行、確認・改善、再試行の流れに沿って、少しずつ地力を付け、現場に出た時に即戦力となるよう頑張っていきます！宜しくお願いします。

また、教職大学院での２年間を大切にして、生徒たちに寄り添い、彼らの成長に貢献できるような教師になることを目指して取り組んでいきたいと思っています。また、生徒たちの可能性を引き出す方法についても考えていきたいと思います。教職大学院の先生方、インターンシップ先の先生方、院生の先輩方、分からないことは進んで聞きに行き、相談もたくさんすると思いますが、２年間よろしくお願いします。

授業研究・教職専門性開発コース１年/岐阜聖徳学園大学附属小学校

稲葉　大晟（いなば たいせい）

皆さん、初めまして。稲葉大晟（いなばたいせい）といいます。岐阜県の本巣市という、柿や鮎が有名なところの出身です。モレラ岐阜というショッピングモールを聞いたことがある人がいるかもしれませんが、それがあるのも本巣市です。海がなく、山や川が多くて、自然豊かな良いところです。今の季節はどこもかしこも桜が満開で、たくさん咲いていてとてもきれいです。ですが、僕が住んでいるところが田舎なせいで、ウーバーイーツが来ないのがとても残念なところです。一応ピザやガストの宅配は来ます。

小学１年生から６年生までサッカー、６年生から中学１年生までバドミントンをやっており、中学では卓球部、高校生からはソフトテニス部に所属していました。運動は得意ではありませんが、スポーツをすることは大好きです。陸上競技や器械運動が苦手で、球技が好きです。

趣味という趣味がなく、休みの日に自分が何をしていただろうかとこれまでの生活を振り返ってみましたが、よくよく考えたらずっと寝ていました。どれだけ寝ても寝足りないという方、無限に寝ていられるという方がいたら僕と同じです。学部時代の春休み中に、好きなように寝るという自堕落な生活をしていたせいで、今の長期インターンシップの早起きがとても辛いです。なので、昔から抱いていたある思いがさらに強くなっています。それはショートスリーパーへの憧れです。短い睡眠時間で充分というの

が羨ましいです。どなたか、ショートスリーパーの方が大学院にもしいらっしゃったら、是非お話を聞きたいです。

屋外で遊ぶのも屋内で遊ぶのも好きです。屋外だと、野球やサッカーを友達と一緒にしたり、サイクリングをしたりします。特にサイクリングには、一時期とてもハマっていました。といっても、自転車はママチャリですが。過去には、ママチャリで、岐阜県の本巣市から、滋賀県の琵琶湖まで（58km）行ったり、岐阜県の本巣市から、愛知県の常滑市まで（92km）行ったりしました。屋内だと、ボードゲームやカードゲームで遊んだり、ゆっくり映画をみたりします。ボードゲームは、たくさんやりましたが、麻雀だけやったことがありません。おもしろそうなのでぜひやってみたいのですが、ルールが複雑で難しそうなので、なかなか手を出せずにいます。映画は、今は、近々公開予定の名探偵コナンの映画がとても楽しみです。以前までは、映画館に行って映画を見ていましたが、自宅のテレビでアマゾンプライムビデオ、通称アマプラが見られるようになり、自宅でまったり映画やアニメをみることができるようになって、ついつい一気見してしまう日々でした。オススメの映画やアニメ、ドラマなどがあれば教えてほしいです。

食べることも大好きです。最近は、二郎系ラーメンという種類のラーメンが特に大好きです。もし福井に、オススメの二郎系ラーメンのお店があれば教えていただきたいです。海鮮料理も大好きなので、福井で新鮮な魚を食べるのも楽しみです。

出身大学は、岐阜聖徳学園大学教育学部英語専修です。免許は、小学校教諭一種免許状、中学校教諭一種（英語）高等学校教諭一種（英語）を持っています。長期インターンシップには、この岐阜聖徳学園大学の附属小学校に行っています。３年生を中心に、中学年の担当になりました。小学校の英語の方や中学年を担当している方がいたら、ぜひお話をさせていただきたいです。

教職大学院では、僕は岐阜が本拠地なので、福井に行くのは、数が限られており、知らないことがほとんどなので、色々教えてください。僕も、岐阜のことをたくさんお話しできればいいなと思っています。距離は離れていますが、仲良くしてくれると嬉しいです。岐阜にも是非遊びに来てください。合同カンファレンスなどで、皆さんにお会いできることを楽しみにしています。これからよろしくお願いします。

授業研究・教職専門性開発コース１年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

川嶋　美咲（かわしま　みさき）

はじめまして。この春から福井大学連合教職大学院連合教職開発研究科教職開発専攻の授業研究・教職専門性開発コースの免許取得プログラム履修生として入学した川嶋美咲です。

私は、富山県の出身です。昨年度の 3 月までは、仁愛大学人間学部心理学科に所属し、取得免許はありません。大学では、オカリナ同好会に所属し、児童館や地域のイベント、チャリティーコンサートなどを行いました。また、子どもたちの動機づけ（やる気）に興味を持ち、卒業研究では中高生のテスト不安と動機づけ、言葉かけをテーマにして卒業研究を行いました。

私は、中学生の時に、思春期の私に向き合い、そして支えてくれる先生と出会いました。その先生に憧れて教員を目指したいと思っていました。しかし、高校 3 年生になる春にコロナウイルスが蔓延したことをきっかけに、人々の心をサポートしたいと思い、心理学科への進学を決めました。心理学科での学びはとても興味深く、カウンセラーの仕事に魅了されていきましたが、その反面、教育現場においてカウン

セラーとしてできることに限界を感じることもありました。そして、私がやりたいことを考えたときに、それは子どもたちにとっての第一のセーフティーネットになること、子どもたちの日常生活の中で心の健康を守ることであり、カウンセラーより教員の方がそれを実現できるのではないかと考え、教員になろうと思いました。

教職大学院の免許取得プログラムでは、私は中高の国語を選択しました。私は決して国語が一番好きなわけではなく、また得意なわけでもありませんが、国語を選択した理由は、2つあります。1つ目は、国語は、心理学とのつながりが一番深いと思ったからです。物語を読解する時には想像力が働きます。その想像力は、将来の状況やあるべき姿を予測したり、見通しをもって行動したりすることに大きく役立ちます。どのように変化していくか分からない未来の社会を生きぬくには、次に起こる事態を想定して対応していく力が必要です。また、人間関係が複雑化している昨今では、お互いの心を想像することで、より深く理解しあっていく必要があると思っています。私は国語力を伸ばしていくことで、自分自身はもちろん、まわりの人の心の健康についても考えられるようになると思い、心理学との結びつきが一番強いと感じた国語を選択しました。2つ目は、私は大学4年間で塾講師のアルバイトをしていて、国語の指導が楽しいと思ったからです。普段は数学や現代文などを中心に指導することが多くありましたが、受験シーズンは、小論文指導の担当を務めていました。自分の指導で子どもたちの小論文が少しずつ上達し、その結果、推薦入試で合格を掴み取ってきてくれることは、何度経験しても、まるで自分のことのように嬉しい瞬間でした。特に、小論文の書き方がわからない、そして文章表現が苦手な子が一生懸命に練習をして、自力で小論文を書ききることができるようになったときは、子どもの成長の速さや、その子の可能性にいつも驚かされました。また、現代文の指導では、子どもが問題を解いて、間違えてしまったときに、どうして間違えてしまったのかを一緒に考えるという時間が好きでした。ヒントを与えて、一生懸命に考え、閃いた子どもたちの顔がすごくいい顔をしており、そんな顔をこれからも見たいと思いました。

大学院では、まずは教員としての知識を身につけていきたいです。そして、私は自分の教師像がまだぼんやりとしか描けていないので、明確にしていきたいと思っています。また、インターンシップでの学びはきっと教員になった際の財産になると思うので、しっかりといろいろなことを吸収して実りあるものにしたいです。

私は、他の大学院生の方々より、教育においての知識がありませんが、一生懸命に頑張ります。きっとご迷惑をかけることも多いかと存じますが、その際にはお力添えいただければ幸いです。これから 3 年間どうぞよろしくお願いいたします。

授業研究・教職専門性開発コース１年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

齋藤　賢哉（さいとう　としや）

初めまして。今年度から福井大学連合教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学いたしました、齋藤賢哉と申します。

昨年度までは同志社大学生命医科学部医情報学科に所属しており、生体情報を扱い、医療分野の工学について学んできました。現在、中学校一種（理科）、高等学校一種（理科）の教員免許を取得しています。出身は福井県です。小学４年生から高校３年生までバスケットボールをしていました。現在は趣味程度にバスケットボールを続けています。

私は中学生の時からぼんやりと教師という職業に関心がありましたが、コロナウイルスのパンデミッ

クの発生があったことから医療の分野に興味を持ち、大学では医療分野について学びました。私が本格的に教師を志すようになったきっかけは学部での学びや、教職課程の履修がとても大きいです。私が在籍していた学部では医療機器の開発に関する研究を行っていました。世の中には様々な診断装置が開発されており、その技術や精度は向上し続け、早期発見や、的確な診断によって数多くの人たちを救っています。複雑な機械や、手法を用いて行われているように思えますが、一つ一つ紐解いていくと、理科の授業で教わった知識に帰着します。この学びを通して、改めて理科という学問は、我々の生活を豊かにし、新しいものを与えてくれる学問であることを実感しました。

しかし、教職課程の授業の中でTIMSS（Trends in International Mathematics and Science Study）という調査の結果の資料を扱った際に、日本の小・中学生は理科の勉強は好きな割合が他国に比べ比較的高く、平均得点も高いことが分かりましたが、将来理科を使った職業に就きたいと考える生徒は国際平均を下回っていて、少し残念な気持ちになりました。

この経験から私は、教師になって理科の楽しさや魅力について生徒たちに伝えていきたいと思うようになりました。

教育実習では、理科の授業を実施する機会がありましたが、思うように生徒たちの関心を引き、効果的に学びを深めることができず、自分の指導力の未熟さを痛感しました。この経験を通じて、理科教育の重要性を改めて感じると同時に、教師としての指導力をもっと高めなければならないと強く思うようになりました。

そのため、より実践的な教育方法や指導技術を学び、教師としての力量を高めるために、大学院での学びを選択しました。大学院での学びを通じて、理論的な知識を深めるだけでなく、実際の授業でどのように指導力を発揮できるかを身につけ、より効果的な授業を提供できるようになりたいと考えています。私は理科の楽しさや魅力を生徒たちに伝え、彼らが自ら進んで学びたいと感じるような授業ができる教師になりたいと思っています。生徒たちが理科に対して興味を持ち、積極的に学ぶ姿を見たいと強く思っています。そのためには、楽しく、わかりやすい授業づくりを工夫し、理科の楽しさを体験できるような授業を展開できる力を身に付けていきたいです。また、インターンシップでは授業実践だけでなく、教師の仕事の総体を知ることができるため、クラス経営や学校の運営など実習では学べないことに積極的に取り組んでいきたいと考えています。

大学院で得た知識と技術を授業に活かし、理科教育をより魅力的で実践的なものにしていきたいと考えています。先生方には、今後多くのアドバイスをいただきながら、自分の課題をしっかりと認識し、成長を遂げていきたいと考えています。また、先輩や同期の皆さんには、互いに支え合い、意見を交換しながら、一緒に学びを深めていきたいと思っています。これからの学びの中で、自分自身をより高め、理科教育における新たな挑戦を続けていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

授業研究・教職専門性開発コース１年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

佐々木　愛那（ささき　あいな）

皆様、初めまして。今年度より福井大学連合教職大学院授業研究・教職開発専門性開発コースに入学いたしました、佐々木愛那と申します。昨年度までは福井大学教育学部学校教育課程初等教育コースに所属しており、社会科を専攻しておりました。現在、小学校一種、中学校一種（社会）、高等学校一種（地理歴史）を取得しております。

私は、友人と将来の夢を語るようになった頃、気

付けば「教師」を目指すようになっていました。最初は、何気なく目指したものだったと思います。小学校から高校へと過ごしていく中で、私の中で教師を目指す意志が次第に強くなっていったものの、それは「教師」という職業にこだわって執着しているだけで、どのような教師になりたいのか、どのような子どもたちを育てたいのかなどの教育観は持ち合わせていないに等しいものでした。しかし、この考えが覆ったのは、学部時代の教育実習での経験が大きく影響しました。実習先で見た子どもたちの様子は、学びに対してとても前向きで、素直で、純粋に疑問に向かって問題を解決しようとしており、その為に試行錯誤を繰り返しながら学びへと向かっていく姿勢をみて、先生という立場の前に、1 人の人間としてこうありたいと思い、目の前の子どもたちを見習いたいと強く思いました。この経験を受けて、子どもたちが生き生きと授業に参加できるよう、学びを享受できるような環境を作っていきたい、学びに対して積極的かつ真剣に向き合う子どもたちを育てたいと考えるようになりました。

そのため、この点を踏まえ、長期インターンシップでは子どもたちが学びを「楽しむ」ことのできる授業の研究に取り組んでいきたいです。子どもたちが学びや自身の考えを深めるための原動力は、楽しさや面白さを感じることにあると考えています。それは活動による楽しさもあると思いますが、一番は子どもたちの素朴な「なぜ？」「どうして？」という疑問から出てくるものであると私は考えています。素朴な疑問を追求しようとする知的好奇心を引き出すことで、子どもたちは心から学びを楽しむことを可能とし、自主的により深い学びへと展開できるのではないか。そのため、大学院では、そのような子どもたちの素朴な疑問を引き出すことのできる問いの出し方や授業の展開の仕方はどのようなものなのかを学ぶことはもちろん、子どもたちの声や小さな変化などを拾い、授業などに柔軟に活用していく力などを養っていきたいです。子どもたちの声や疑問を少しでも授業に生かすには、どのような工夫を行うことが子どもたちにとって有効なのかということを研究していくために、子どもたちの見取りを慎重かつ丁寧に行っていきたいと考えております。そのための手立てとして、インターンシップ先の先生方の授業を積極的に見学させていただき、どのような方法や声掛けで授業展開・研究を行い、それによって引き出される子どもたちの反応はどのようなものなのかなどを見取り、自身の授業研究に活かしていきたいです。

さらに、私が目指す教師像の１つに「１人でも多くの人が、社会を楽しんで学べるような授業づくりを行える教師」があります。元来、社会科を専攻した理由は、自身の経験上、社会科に対して嫌悪感を抱いている学生が多く、どちらかといえば暗記科目として義務的に学習に取り組んでいるような印象を受け、その状況に強く悲しみを覚え、社会科の本来の楽しさ、面白さを体感してもらいたいと考えたためです。そのため、学部時代には、社会科が直面している課題は何か、課題解決のためにどのような取り組みを行うべきかを教育実習や授業研究を通して考え、社会科の魅力を引き出そうと取り組んでまいりました。現在、明確な答えにたどり着くことはできていませんが、教育実習などを通して、目の前の子どもたちの姿と向き合い、彼らの学びに向かう姿を尊重し、その姿勢を授業に取り入れて授業づくりを行ったことで、微力ながらも子どもたちに社会科の魅力を伝えることが出来たのではないかと感じておりますし、目の前の子どもたちと向き合うことの大切さに気付くことが出来ました。しかし、限られた時間の中で、児童の興味・関心や発言・反応を授業に活かしながら、教えるべき知識を授業の中でどう展開していくと良いのか、授業の中で生まれた多くの疑問に対応することの難しさが課題として残りました。そのため、その疑問に対してどのようなアプローチをとるべきだったのかなどを、課題に対しても今後の長期インターンシップの中で向き合っていきたいです。

最後になりますが、大学院では多様な学びや意見を柔軟に吸収し、自分の糧にしていきたいと思っております。これから 2 年間、インターン先や大学の先生方、関わる全ての方々、精一杯学びに向かって行きますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いい

たします。

授業研究・教職専門性開発コース１年/福井大学教育学部附属特別支援学校

杉畠　和奏（すぎはた　わかな）

福井大学連合教職大学院授業研究・教職専門性開発コースに入学しました、杉畠和奏です。よろしくお願いします。昨年度までは上越教育大学に在籍しており、小学校一種、中高一種(英語)を取得しました。今年度からは免許取得プログラムを利用して、特別支援学校の免許も取得予定です。

出身は石川県です。私は好奇心旺盛な性格だと自負していて、小学生のときはバトントワリング、中学生のときは放送部、高校生のときは英語部と、新しいことに挑戦し続け、大学も「一人暮らしをしたい」と思い、親元を離れ新潟県に進学しました。大学に入ってからは、ダンス部に入ったり、英語やヨガを習ったり、留学に行ってみたりなど、好奇心のままになんでも挑戦しました。

私がはじめに教員を志したのは、小学校のときです。当時の先生は、友人関係が上手くいっていなかった気の強い私に、粘り強く向き合ってくださりました。この出会いのお陰で、向き合ってくれることの有難さ、嬉しさ、私もこうなりたいという思いが芽生えました。その後、一時は違う夢を抱いていた時もあったのですが、高校での先生との出会いで再び教員を志すようになりました。この先生も悩む私に丁寧に向き合ってくださり、子どもに寄り添える教師という仕事に魅力を感じました。大学は教育大学に進み、教育と向き合う 4 年間を過ごしました。教育実習、学習支援で関わった子どもや、同じ夢を志す友人との出会いはかけがえのない大切な思い出です。

これまでの学びを経て、私は将来、特別な教育的ニーズのある子どもの支援、不登校・不登校傾向のある子どもの支援など、ひとりひとりの子どもと向き合うことのできる教師になりたいという思いがあります。

特別な教育的ニーズのある子どもの支援に関心をもつようになったのは、学部時代に特別支援学級でボランティアをしたことがきっかけです。個に応じた支援ができることに魅力を感じ、ゼミも特別支援教育に関するところに所属していました。ゼミでは通常の学級や通級指導教室、言語通級、特別支援学級など様々な学校の、様々なクラスでの支援を経験させていただきました。卒業論文では、小学校教師はどのような経緯でインクルーシブ教育、特に障害理解教育を行うようになるのかについて、交流及び共同学習の視点で研究を行いました。支援や研究を進めるうちに、将来は特別支援教育を強みとした教員になりたいという思いが芽生えましたが、その一方で特別支援教育についての知識や経験が少ないことにも気が付き、もっと特別支援教育について専門的に学びたいと思ったため、教職大学院に入学することを決意しました。

不登校・不登校傾向のある子どもの支援に関心をもつようになったのは、自分自身の高校での経験がきっかけです。学部時代には市の適応指導教室や、学校内で不適応傾向のある子どもが集まる教室でのボランティアに参加したり、家庭教師をしたりなど、子どもや保護者の気持ちを知ることができました。

大学院は、私の目指す教師像の実現に向けて知見を深める期間だと考えています。週間カンファレンスや月間のカンファレンス、ラウンドテーブルなどで様々な立場の話を聞くことや、インターンシップ先での子どもや先生方とのかかわりで、自分の視野や経験の幅が広がることがとても楽しみです。好奇心旺盛な性格を活かして、充実した 3 年間になるよう、何事にも挑戦していきたいです。

インターン配属校の先生方や教職大学院の先生方にはご迷惑をおかけすることが多々あるとは思いますが、感謝の気持ちと謙虚さ、笑顔を忘れずに精進していきます。これから３年間よろしくお願いします。

授業研究・教職専門性開発コース１年/福井市安居中学校

多田　和生（ただ　かずき）

初めまして。今年度より福井大学連合教職大学院授業研究・教職専門性開発コースに入学しました、多田和生と申します。出身は福井県永平寺町であり、昨年度までは京都府にある私立龍谷大学経営学部経営学科市場コースに所属しておりました。専門教科は社会科であり取得免許として中学社会一種、高校地理歴史一種、高校公民の一種免許を取得しています。

私が、福井大学連合教職大学院に進学した理由は大きく二つあります。まず一つ目として、私は大学の3 回生まで将来人のためになる仕事につこうという思いだけで勉学を行っていました。大学では教職免許を取りつつも、主として学んでいたことは会計や簿記、企業運営などで、将来的にも教育系でなく銀行や保険会社などへの就職を思い描いて勉学に励んでおりました。しかしながら、就職活動の中で、ある銀行の人事担当の方が「結局、銀行も金ではなく、人との信頼関係で成り立っていて、人が育たないといけない」というようなことをおっしゃっていました。この言葉が、私の中でなぜか心に刺さり、教員という仕事もよいのかもしれないと思うようになりました。

しかしながら、教育者という仕事は自分自身の中では重く、ただ「なりたい」や「人に教えるのが得意」などという理由でなってよい職業ではないと思います。だからこそ、教職大学院に進学し、教育を主として学びたいと考えました。

また、二つ目の理由としましては、小さい頃より私は、教育者にはあらゆるタイプの教員がいるなと感じていました。尊敬されるような教員や反面教師のような教員、その他にもいろいろなタイプの教員がいる中で、私はあらゆる教員がいるからこそ生徒にも個性が生まれると考えています。しかしながら、どのような教員にも必要とされる「学び続ける」とは具体的には何を指すのか、また「より良い教育」とは何なのか、いうことが私の中で大きな疑問でした。この疑問に対しては、今の段階で私の考えとしては、答えのようなものに近づいたとしても、明確な答えはなく、教員によって感覚も異なり、だからこそ研究され、日々新しく生まれ変わっているものであると解釈しています。ただ、この解釈が正しいとは自分では少しも考えておらず、この疑問の答えに少しでも近づくためにも教職大学院に進学することに決めました。

ここまで、私が大学院に進学した理由をお話ししましたが正直なところを言いますと、覚悟を決め教育者の道を志している最中ではありますが、心配性な性格であるが故なのか、教育に対しての絶対的な自信がつけられるか、生徒の貴重な学校生活にかかわる仕事に自分が携わってもいいのだろうか、など不安の種は尽きません。しかし、それ以上に、これから社会に出て活躍するであろう子供たちに関われる、時にはつらく不満に思うであろうことでも、やったことに意味が必ず持てるであろう教育者という仕事は誇らしいであろうとも思います。指導者は導くという言葉がある通り、人の先頭に立ち臆することのない姿を見せる必要がある一方、日々研修と修養に努め、心配や不安という感情を活力に努力をし続けなければなりません。自分自身の教員を目指す上での不安な気持ちも、教員に対しての憧れや尊敬の感情も、どちらも忘れることなく己を律し、これからの大学院生活がただの２年間となることのないように、日々努力していきたいと思います。これから、あらゆる面で先生方や学友にご迷惑をお掛けしてしまうことがあると思われますが、なにとぞよろしくお願い

いたします。

授業研究・教職専門性開発コース１年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

田中　志音（たなか　しおん）

初めまして。今年度から福井大学連合教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学しました、田中志音です。よろしくお願いします。昨年度までは、仁愛大学人間生活学部子ども教育学科に所属していました。取得免許は、幼稚園一種と小学校一種です。

私は幼稚園の頃から素敵な先生との出会いに恵まれており、自然と学校の先生に憧れていました。しかし、私は自分に自信がなく、人前に立って児童・生徒を先導する教師とは真逆のタイプの子どもでした。そんな私が本格的に教職を志したきっかけは、２つあります。

１つ目は、生徒の気持ちに寄り添った声掛けをしてくださる先生との出会いです。私は中学生の頃クラスメイトとうまくいかず、ストレスから過敏性腸症候群を発症し、学校に通うことを苦痛に感じている時期がありました。こうした環境でも私が不登校にならなかった理由は、支えてくださる先生がいたからです。この頃の私は、高校受験に向けて数学を一生懸命勉強するも、なかなか結果が点数に現れず悩んでいました。落ち込む私を見かねて、数学の先生は「今すぐに点数が伸びなくても、途中式が良くなっている。必ず伸びるから、いつでも質問しに来なさい」と言ってくださり、結果ではなく過程を見てくれる大人がいることが励みになりました。

２つ目は、ロールモデルとなる先生方との出会いです。小学生の頃、私は勉強が「したいこと」ではなく、「しなければいけないこと」という認識でした。中学生になると、定期テストがあり、試験の結果が振るわないと「何のために勉強しなければならないのか」と自問自答するようになりました。しかし、中学生の頃、「勉強って楽しい！」と思うきっかけとなる授業に出会いました。それは中学２年生の理科の授業で、班ごとに調べる臓器を分担して「解体新書づくり」をし、作った冊子を基に生徒が授業者になる「リトルティーチャー」という取り組みでした。私の班は肝臓を担当し、「どうすれば授業を楽しんでもらえるか」について考えて、ストーリー形式で伝える等、主体的に活動したことを今でも覚えています。この経験を通して、授業は「受けるもの」ではなく、「作り上げるもの」という印象に変わり、それ以来、苦手だった理数系の授業でも自信を持って発言できるようになりました。時を同じくして、尊敬できる教育実習の先生にも出会いました。休み時間など学級で一人になってしまった時や、授業中に分からないことがあっても言い出せない私を見かねて、優しく声をかけてくださいました。その先生と沢山関わっていくうちに、「私もこんな大人になって、子どもたちに寄り添える人になりたい」と教師という仕事に憧れを抱くきっかけとなり、勉強するモチベーションにもつながりました。

高校に入った後も、「教師になりたい」という思いを抱き続け、大学では模擬授業を積極的に取り組ませていただいたことで、子どもたちと授業を作り上げていく喜びを実感しました。しかし、小学校実習を経験し、現場の先生方の授業を沢山拝見したり、自分が授業実践させていただいたことで、このまま教育現場に出ることに不安を抱きました。そこで福井大学教職大学院でインターンシップを経験させていただき、実習だけでは知り得なかったことも積極的に学びたいと思い立ち、入学を決意しました。

私が大学院で特に取り組みたいことは、「授業力を高めること」です。私は昨年、小学校４年生のクラスで実習させていただき、算数・国語・社会の授業を１回ずつ、また道徳の授業を２回経験しました。先生方

の授業を拝見する中で、「授業には盛り上がる活動が必要である」ということを学び、授業実践では児童が自ら学びたくなる活動を取り入れることに重点を置きました。一方で、授業実践後に先生方からご指導いただき、新たに見つかった課題も数多くあります。例えば、「教師が授業でファシリテーターになること」です。論点がずれた発言が見られた時、適切な問い返しが思い浮かばずに進行してしまうことが何度もありました。また、導入で時間をかけすぎるあまり、活動時間が減り、本時の目標を達成できなかったこともありました。こうした課題は、一朝一夕で改善できるものではないため、授業観察や実践を繰り返す中で自分なりに答えを見つけ、児童を誰一人取り残さない授業ができる教師になれるよう、邁進したいと思います。

今年度は小学校１年生のクラスでインターンをさせていただくことになりました。１年生は今から学級を築いていく段階であり、学級経営には工夫が求められます。私はインターン生として子どもたちと積極的に関わりながら、幼稚園実習で学んだことを活かしつつ、先生方の指導・支援を拝見しながら成長していきたいと思います。

最後になりますが、先輩方や現場の先生方からの意見を聴き、教師として自分の引き出しを増やせるよう取り組んでまいります。これから２年間よろしくお願いします。

授業研究・教職専門性開発コース１年/福井県立羽水高等学校

谷口　裕都（たにぐち　ゆうと）

初めまして。福井大学連合教職大学院の授業研究・教職専門性開発コース（４系）に入学いたしました、谷口裕都と申します。昨年度までは、立命館大学理工学部数理科学科に所属し、主に幾何学について勉強しておりました。取得免許は、中学校一種（数学）、高校一種（数学）です。

大学時代は、趣味の野球観戦に没頭しており、日本全国飛び回って試合を観に行っていました。また、研究室は幾何学の研究室に所属しており、卒業研究ではガウス・ボンネの定理について取り扱いました。時間は要しましたが最後には、満足のいく発表をすることができました。

私は大学に入学した当初、教員になることはあくまでも選択肢の一つにしかすぎず、必ずしも教員になろうとは思っていませんでした。昔から人に教えることは好きで、その特技を活かしたいと思い、個別指導塾でアルバイトを始めました。初めは、ただ指定された範囲を時間通りに終わらせることだけを意識して取り組んでいました。しかし、それでは生徒の能力を最大限に伸ばすことができないということに気づき、それからは、生徒の習熟度によって補足用の教材を用意したり、解く問題を選定したりしました。その結果、生徒の志望校合格に多少なりとも貢献することができたと感じ、「教える」ことにさらに興味を持つようになり、教員を志望するようになりました。しかし、個別指導塾はあくまでも生徒の成績を上げて志望校に受からせることにフォーカスしているだけです。教員の役割は、生徒の成績を上げるだけでなく、社会性を身につけさせたり、私生活面でのサポートを行ったり、多岐にわたります。そういった教員の役割を教育実習では身近に感じることができました。教育実習は、母校の永平寺中学校に三週間勤務させていただきました。当然のことですが、教員目線から見た学校はとても新鮮で、知らなかった教師の仕事や教員が持つべき心構え等、多くのことを学び、有意義な時間を過ごすことができました。特に、生徒との関わり方において多くのことを学びました。授業にも繋がることですが、生徒の目線に立って考えることが必要だとわかりました。こちらがわかるだろうと予測しているポイントでも、生徒は理解していな

いことが多いので、本当にこの説明で理解してもらえるのだろうかと基礎・基本に立ち返って説明することが必要だと痛感しました。研究授業では、入念に準備を重ね、満足の行く授業を行うことができました。三週間という短い教育実習期間でも、生徒の成長を強く実感することができました。長期インターンシップは、一年間という長い期間を通して生徒の成長を実感できるので、楽しみな気持ちが大きいです。

私が福井大学連合教職大学院に入学を決めた理由は、もちろん他大学にはない長期インターンシップがあるというのは大きな決め手の一つではありますが、教育についてもっと深く学ぶ必要があると思ったからです。学部時代の教職課程では、専門科目の勉強に追われていたこともあり、満足に教育について学ぶことができませんでした。この状態で教育現場に出るよりも、一度教職大学院で学びなおしてから教育現場に出た方が良いと思いました。また、現職の教員の方とも意見を交わす機会が定期的に用意されていることも素晴らしいカリキュラムだと思いました。様々な年齢層の先生方と意見を交わすことで得られる学びは大きいと思います。教育現場での生きた学びを得ることは貴重な機会ですが、それを自分の力にできるかは、学ぶ姿勢にかかっています。積極的に生徒や先生方とコミュニケーションをとり、力をつけていきたいです。

最後になりますが、二年間という長いようで短い期間ですが同じ教師を目指す一員として、皆さんと高め合って行けたらと思っております。よろしくお願いします。

授業研究・教職専門性開発コース１年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

松本　陵亮（まつもと　りょうすけ）

今年度より福井大学連合教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学しました、松本陵亮と申します。福井県出身で、昨年度までは福井大学教育学部中等教育コースに所属し、社会科を専攻していました。取得免許は、小学校一種、中学校一種（社会）、高等学校一種（地理歴史・公民）、特別支援学校一種です。

私は中学１年生のときから教員を志し始めて、現在にまで至ります。しかし、学部４年次まで「なぜ教員になりたいのか」は自分でもよくわかっていませんでした。というのも、私は友人からの誘いがきっかけで教員になることを決めただけであり、そこには教員という職や教育という分野に対する自分の思いや考えがほとんどなかったからです。したがって、およそ10年もの間、言うなれば「なんとなく」で教員を目指していたことになります。ただし、理由はともかく教員になること自体は、自分の中での決定事項でした。そのため、学部時代には、教員になることを常に意識しながら、自分の専門以外にも幅広く学んで視野を広げることに努めてきました。

そんな私ですが、今では自分が教員になりたい理由を見つけることができています。それは、私が教員を志し始めた当時に抱いていた思いでもあり、社会科教員になることを選んだ理由でもあります。いつの間にか忘れてしまっていただけで、教員になりたい理由はずっと自分の中にあったことにようやく気づくことができました。これに気づいたのは学部４年次ではありますが、思い出すにあたって大きな意味を持っていたのは、学部３年次に経験した教育実習です。これは、私の授業観などが変わった衝撃的な経験でした。詳細は省きますが、私はこの教育実習での経験や学びがあったからこそ、ようやく「なんとなく」以外の理由をもって教員を目指すことができるようになったのです。もちろん、教育実習以外の経験や学びも積み重ねてきたからこそ見つけることができたと思っています。

しかしながら、気づくのが遅れてしまったことが悔やまれます。「なんとなく」で過ごしてきた時間があまりにも長かったためか、授業や児童生徒との関わりなどにおいて、私の教員としての基盤の弱さや軸の不安定さなどを感じる機会が多いのです。特に、授業はいまだに自信がもてません。そのため、研鑽のための時間がほしいのですが、大学卒業後すぐに現場に出て、日々の業務などに慣れながら自己研鑽に取り組めるほどの器用さを私は持ち合わせていません。また、実際に授業をしたり児童生徒と関わったりしながら経験を積むことができる現場の環境で過ごすことも諦め難いとも感じていました。そんな私にとって、教職大学院は「時間」と「環境」が揃った理想的な場であり、進学しない手はありませんでした。こういうわけで、私はこれからの 2 年間、教職大学院で学ぶことにしたのです。

教職大学院は、「時間」と「環境」が揃っている私にとっての理想的な場であるとはいえ、私自身が受け身ではその恩恵を十分に受けることができないと思います。社会科の専門性を高める、生徒の成長や学びを見取る、視点を増やす、視野を広げるなど、取り組みたいことや身につけたい力などは挙げきれないほどに多いです。そのため、長期インターンシップをはじめ、カンファレンスなどにおいても、遠慮しすぎずに取り組み、積極的に学んでいく所存です。そして、教職大学院に進学した意味や価値があったと自信をもって言えるような有意義な 2 年間にすることも意識しながら精進いたします。

インターンシップ先の学校の先生方や教職大学院の先生方をはじめ多くの方々に助けていただいたり協力していただいたりすることになると思いますが、精一杯取り組みますので、これから 2 年間どうぞよろしくお願いいたします。

授業研究・教職専門性開発コース 1 年/福井県立武生高等学校

水島　慧子（みずしま　けいこ）

初めまして。本年度より福井大学連合教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学致しました、水島慧子と申します。昨年度までは、福井大学教育学部中等教育コース理数・生活教育サブコースに所属し、小学校一種、中学校一種（理科）、高等学校一種（理科）、特別支援学校一種（知的障害者・肢体不自由者・病弱者（身体虚弱者））の免許を取得しました。理科の中でも、特に生物に力を入れて学んできました。卒業研究では、発光バクテリアを用いた教材開発を行う中で、微生物を育ててきました。微生物を育てることには自信があります！

私が教員に憧れを抱くようになったきっかけとして、高校での SSH で行った、乳酸菌の研究での先生との関わりがあります。乳酸菌の効用について調べるという研究内容の中で、先生方は研究に不慣れな私に寄り添って技術面でのサポートをして下さいました。結果的に私は、楽しく研究を行うことができました。この経験から、理科の醍醐味である実験を通して、子どもたちが楽しく学ぶことができるように支援することができる教員になりたいと強く思い、福井大学教育学部に入学することにしました。

福井大学では、子どもたちと関わる機会が多くあり、探求ネットワークもその一つです。探求ネットワークでは、「ひらめき☆理科ブロック（通称、ひらめき）」に所属し、子どもたちと実験を通して、楽しく学んでいました。ろ過装置を作る実験をした際には、子どもたちが積極的に活動に参加し、水を綺麗にしていました。私はひらめきで、好きな理科を通して、子どもたちと関わる楽しさを実感することができました。

さらに、「初級 CST 養成プログラム（CST）」に参加し、理科に強い教員となることができるように、学

びの場に参加したり、インターンシップに行き、先生方の授業について学んできました。CST では、野鳥観察をしました。これまでは興味を持っていなかった野鳥でしたが、野鳥の学びを通して、野鳥へ興味を持ち、自主的に学び始める契機となりました。

そんな私が福井大学連合教職大学院への入学を決意したきっかけとして、実習での悔しい思い出があります。それは、福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程で行った、7 年生理科「音の世界」の授業実践での思い出です。私たち理科の実習生は、楽器作りを通して、振動数や振幅について、楽器と関連付けしながら学んでいくことができるように授業を計画していました。しかし、実際に私が授業をしてみると、楽器作りが主になってしまい、私だけでは理科の学びに生徒を導いていくことはできませんでした。授業が終わる度に、次の授業は何をするべきか迷っており、授業を通して、子どもたちに寄り添った働きかけができていませんでした。そのため、子どもたちに寄り添った働きかけを通して、私は子どもたちが学びを展開できることを目標にして、福井大学連合教職大学院への入学を決意しました。

大学院では、長期インターンシップの中で、先生方や子どもたちを観察することを通して、子どもたちに寄り添った働きかけを模索していきたいと考えています。さらに、インターンシップの中で出てきた不安や疑問点について、大学院の仲間と共有し、より良い実践に繋げていきたいと思っています。まだ大学院に入学したてで、不安だらけではありますが、仲間とともに助け合っていきたいと思っています。これから、どうぞよろしくお願いします。

授業研究・教職専門性開発コース 1 年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

三輪　佑輔（みわ　ゆうすけ）

はじめまして。今年度より福井大学連合教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学しました三輪佑輔です。昨年度まで、岡山理科大学・生物地球学部・生物地球学科に所属していました。取得免許は、中学校一種（理科）、高等学校一種（理科）、学芸員です。また、IB（国際バカロレア）と呼ばれる IB 教育課程を修了し、現在 IB 機構へ DP 免許を申請中です。大学では生物や古生物を中心に教育課程も学んでいました。

出身は三重県で、幼少期から動物園や水族館、博物館などを訪れ、特に古生物に興味関心があり、図鑑やパソコンなどで調べて、関連する新聞の記事を記録し、自分だけの研究ノートを作成していました。また、音楽も好きで、幼稚園から大学１年生までピアノを習っていました。お気に入り曲は、ラフマニノフ前奏曲【鐘】です。

私が教職大学院を志望したきっかけは２つあります。１つ目は自分の経験からあります。私は生まれつきアスペルガーを持っています。アスペルガーは現在、ASD の中に位置づけされています。特徴は様々ですが、私の場合は拘りが強い、特定の興味、抽象的な指示理解やイメージが困難、感情表現や相手の気持ちの理解が苦手などです。幼稚園や小学校の幼少期からコミュニケーションや学校生活で困難が多くありました。私自身、勉強だけでなく、学校生活を送ることもあまり上手くいかないことが多かったため、私は同じ境遇で悩みがある生徒の支えになり、共に話し合いながらサポートしたいと考えるようになりました。また、中学や高校は多感な時期であり、自分の生活で精一杯になることも珍しくありませんし、自分もそうでした。よって、生徒の気持ちに立ちサポートできる存在になりたいです。しかしながら、まだまだ関わりの経験も豊富ではないため、長期のインターンで生徒と関わりながらどのように成長していくのか学びたいです。

２つ目は教育実習などの経験です。教育実習では中学１年生のクラスへ行き、理科を担当しました。始めは不安で、授業以外にも生徒と上手く接することができるのかと心配だらけでしたが、当時は自分も悩んでいたことを考え、真剣に向かい合いました。授業以外にも、空いている休み時間は教室へ行き、生徒と積極的に会話したり、遊んだりしました。その結果、最終日にはサプライズでお別れ会を開いてもらいました。この時の喜びは、言葉に変えられないものでした。３週間ではありましたが、丁寧な関わりをする中で、生徒も少しずつ話しかけてくれるようになり、授業での発言も増えました。

また、教育実習以外にも、去年の夏にモンゴルのゴビ砂漠で化石発掘調査へ行き、それを秋に高校での授業実習で共有しました。モンゴルではただ化石を発掘するだけでなく、モンゴルの方々と英語を使いながら、荷物の準備や会話を行います。また、発掘した化石も全て研究室へ持ち帰ることはできず、ゴビ砂漠にはモンゴルの調査員以外にもロシアやアメリカの調査員もいるため、話し合いながら、化石の持ち帰りや発掘現場を分けます。一変した環境の中でも行動していくことは、入学した学校と似ていると私は考えます。また、実際の化石発掘調査に参加して感じたことや感想を生徒に伝えることは、実際の海外での生活や将来海外に行きたい人にも伝わりやすいです。

最後に大学院の長期インターンを通して、生徒の関わり方や自分の個性を発揮して生徒のポテンシャルを引き出したいです。また、福井は恐竜の県でもあるので、化石を使った授業を行いたいと考えているので、博物館でも学びたいです。自分の培った個性を活かして教員を目指したいです。配属先の先生方や教職大学院の先生、先輩にご迷惑をおかけしますが、一生懸命頑張ります。宜しくお願いします。

授業研究・教職専門性開発コース１年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

村上　誠（むらかみ　まこと）

初めまして。福井大学連合教職大学院授業研究・教職専門性開発コースに入学しました村上誠と申します。よろしくお願いいたします。昨年度までは、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科に所属しておりました。取得免許は、小学校一種、中学校一種（数学）、高等学校一種（数学）です。私は高校生の時に軽音学部に所属しており、キーボードを担当していました。仲間とともに演奏することの楽しさを実際に感じ、大学に入ってからも軽音サークルに入部し、演奏したことのない楽器にも挑戦してきました。

私が教職大学院に進学しようとしたきっかけは、教育実習での自分の授業に納得することができなかったためです。教育実習は小学校と中学校の二校に行きました。最初は中学校に教育実習に行き、３週間の実習を行いました。１週目は授業見学を行い、学校で行われている授業の様子をつかみ、生徒との仲を深めるというものでした。ここまでは順調に進んでおり、２週目には授業をするようになっていきました。大学の授業で練習していた時と同じようにうまくできるだろうと考えていましたが、現場の子どもたちを相手に授業をするのは大学生相手に行うものとは大きく異なっていました。まずは、私が想定している発言を生徒から引き出すことがとても難しいというものです。指導案を書いているときに生徒の予想される発言を書くのですが、思っている発言が出なかったり、私が考えている授業の進行からずれてしまったりと想定している授業にはなることはありませんでした。実際は生徒の発言をうまく活用して授業展開していくことが一番望ましいのですが、私が柔軟に対応することができなかったり、生徒が私の望む意見を頑張って出そうとしてくれているのを目の当たりにしたりして、自分の力のふがいなさを大きく実感しました。小学校の実習においても、同様の流

れで実習を行いました。しかし、児童主体の授業が展開されており、教師が説明することがほとんどない授業展開をされていました。児童同士の対話を多くとるようにされており、考える時間がたくさんあるように感じました。私も同様に授業展開をしてみましたが、担当してくださった先生のように、児童たちの中でうまく答えが出なかったり、45 分という短い時間の中で、話し合いの時間を取りすぎてしまったりしたことで、時間配分をうまくすることができませんでした。つまり、教育実習中に、私は自分が納得できるような授業を一度もすることができなかったのです。そのため、教職大学院に入り、まずは自分の授業力を磨きたいと考え、進学いたしました。

私が教職大学院で頑張りたいことは、先ほど書いた通り、まずは授業力を磨きたいと考えています。次に、この教職大学院では一年という長期インターンが他ではないような魅力となっているため、一年間を通して、学級経営について学びたいと考えています。教育実習では、約一か月しか学校に行くことができませんでしたが、子供は日々成長しており、その成長をこのインターンで見て感じたいと考えています。そして、現職の教師がどのようにして生徒との関係作りや学級経営を成し遂げているのかについて、間近で勉強したいと考えています。実習の時に、一日学級担任という形でさせてもらいましたが、朝の会や帰りの会での話すこと、連絡帳の記入等困ることがたくさんあったため、現場の実習を通して力をつけていきたいと考えております。

最後になりますが、これから教師を目指すものとして、まだまだ分からないことだらけではありますが、教師になりたいという思いは人一倍あると考えております。教職大学院に来て、たくさんの院生の方々、教師の方々と関わり、共に学び合えることをとても楽しみにしております。教職大学院での学びはきっと、私が教師になった際に大きな助けになると考えております。2 年間という短い期間ではありますがどうぞよろしくお願いいたします。

授業研究・教職専門性開発コース 1 年/福井県立羽水高等学校

由比　亮成（ゆひ　りょうせい）

はじめまして。今年度から福井大学連合教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学しました、由比亮成と申します。所属は、授業研究・教職専門性開発アプローチ 4 系です。出身は福井県で、昨年度までは名古屋大学文学部西洋史学科に所属し、主に中世史について学んでいました。取得免許は中学校 1 種（社会）、高等学校 1 種（地理歴史・公民）です。

西洋史学科では、主に古代ギリシャやフランク王国、アメリカ独立戦争に関する政治や文化について学びました。特に、近年デジタル化が進む中世の史料の収集、分析・整理から、中世の教皇文書の形式、政治的出来事に対する当事者や同時代人の問題認識を調べました。卒業論文は、神聖ローマ皇帝とローマ教皇の間で締結されたヴォルムス協約の有効性について、書簡や年代記を用いて研究しました。

私は、元々明確に教師を目指していたわけではありませんでした。歴史に関われる仕事に就きたいと考えており、教師はその中の 1 つであり、学部卒業後はそのまま名古屋大大学院への進学を考えていました。しかし、4 年次の教育実習をきっかけに、自己完結する研究よりも、生徒に伝え、ともに学んでいくことに魅力を感じ、教員への道を強く志望するようになりました。

教育実習では、初回の授業は時間が余り、板書も見づらいものでした。しかし、回を重ねる毎に生徒の好意的な反応が聞こえるようになり、手応えを感じるようになりました。研究授業は、これまでの授業経験

を活かし、地図史料に ICT を使い、問いのある授業に挑戦しました。先生方からは及第点を頂き、主な指摘は情報量が多いというものでした。自己評価としても手応えを感じていましたが、校長先生に「教員主体の詰め込み教育ではなく、生徒を惹きつける授業にしていかなければならない」と指摘をいただきました。歴史はとにかく用語を覚えることが重要だという認識を持っていたため、衝撃を受けました。ご指摘いただいた点を踏まえて私の研究授業を振り返ると、反省点が浮き彫りになりました。基礎的知識のための時間を大幅に取ったことで、地図史料を使っても、生徒自身が史料を読み取る時間を取らず、私が主体となって進めてしまっていました。その結果、授業全体を見たときに、山場がどこにあるのか分からない授業になっていました。実習後、授業形態の改善の必要性を実感したことで、基礎的知識と発見学習的な活動の兼ね合いについていくつかの実践例を調べました。一通り教科書の内容を終えてから資料を用いる授業や、基礎的知識は生徒に予習させ、授業で問いを立てるといった授業がありましたが、「惹きつける授業」について自分の中で答えを出すことはできませんでした。

教育実習で得た自分の授業に手応えがあった時の充実感や、授業には正解が存在しないことの難しさに魅力を感じ、教師になりたいという思いが明確になりました。その上で、教職大学院での学びから自らの視野を広げ、経験を積んでいくことで私が持つ問題意識と向き合っていきたいと考えるようになりました。まずは授業に山場を作ることを念頭に置いて、教科書の内容を全て扱うのではなく、丁寧に扱うべき部分を探していこうと思います。そして、歴史が苦手な生徒の関心を惹きつける授業を目標に試行錯誤していきたいと思います。また、大学院の先生方と院生のみなさん、インターンシップでお世話になる先生方と生徒のみなさんから学び、自分の経験や考えを相対化することで、正解に固執しないように心がけていきたいと思います。

教育分野の知見が足りないため、一つ一つの機会を大切にし、精一杯学んでいきたいと思います。これからよろしくお願いします。

授業研究・教職専門性開発コース１年/福井県立丸岡高等学校

渡辺　悠日（わたなべ　ゆうひ）

初めまして。今年度より、福井大学連合教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学しました、渡辺悠日と申します。よろしくお願い致します。出身は福井県で、昨年度までは、福井大学工学部物質・生命化学科に所属しており、化学工学を専攻しておりました。現在、高等学校一種（理科）を取得しています。

工学部出身ということもあり、最初から教員を目指していたわけではありませんが、教員という仕事に興味を持っていたため、一応持っておこうという気持ちで、教員免許を取得できるよう学部時代に取り組んでいました。そんななかで、教師を志望するようになっていきました。

まず、教員という仕事に興味を持っていた理由としては、高校時代の恩師の性善説を基にした教育理念に感銘を受け、憧れを抱いていたからです。

その性善説を基にした教育理念とは、もともと善であるから悪くならないように教育するということではなく、必ずその人にはその人のいいところがあるから、悪いところを叱るのではなく、その人の良さを見つけ伸ばしていこうという教育理念でした。

自分も、恩師のような教育理念を持ち、生徒それぞれの良さを見つけ出し、生徒自身が存在意義を確立させ、人生を切り拓くために挑戦し続ける人をつくる「引き出す教育」ができる教員に尊敬の念を持つと

ともに、憧れていました。その後大学生活を送っていく中で、教師を志望するようになりました。

しかしながら、教育実習では２週間という短い期間であったため、ペアワークやグループワークを取り入れたアクティブラーニングの授業や、実験を取り入れた活動を行うことが難しかったです。主体的な学びを促すような働きかけや疑問を抱かせるような問いかけをしたりすることができず、自分自身の力不足を痛感しました。また、生徒にとって面白い授業とはなにか、探究的な授業とはどのようなものか、受験のための学習とどう組み合わせるのかなども課題として感じられました。これらに向き合う時間と学びの場が私には必要であると感じ、教育現場で直接仕事を学び、実践力を高めながら、授業研究や実践の振り返りなどを通して課題に向き合い、学びを深めていくことができる教職大学院への進学を希望するようになりました。教職大学院では、学校現場での長期の実習を通して、授業づくりについて実践に即して研究し、実践力と教育の専門性を培っていきたいです。具体的には、工学部出身であるため、実験における経験や知識、技術を駆使し、生徒が理科に対してより興味を示すような実験を通したアクティブラーニングを行っていきたいと思います。どういった授業に対して、生徒たちが自主的に学習してくれるのかを観察し、長期インターンシップを通して自分の中で具体的なものを確立させたいです。さらに、生徒達自身が探究し、コミュニケーションを取りながら学習できる授業づくりを研究したいと思います。私は、工学部で学んだ物理・化学のより専門的な知識を生かして、生徒が事象に対して様々な視点で捉え、解けるようになる授業、そして時にはユニークな実験やグループワークを交えた授業を展開し、生徒が楽しんで自発的に学べるような「楽しむ教育」ができる教員を目指します。

また、長期でインターンシップを行うことで見えてくる学校現場が直面している課題に対して教師と協働して取り組み、解決策を探っていきたいです。さらに、工学部出身ということもあり、教育に対する知識や経験が浅いため、長期でインターンを行うからこそ学べる教材研究や指導方法といった先生方の取り組みや、人間関係の育成や生徒への声掛けや寄り添い方等、生徒との関わり方についても学んでいきたいと考えています。これらの過程で、教育における専門性を高めたいです。大学院では、実践的に学び、大学では学べなかった教育における知識や技術を学び、教育の専門性を高めることで質の高い教育を可能にする教員になることを目指したいです。

最後になりますが、大学院の先生方や院生のみなさん、そして配属校の先生方、生徒のみなさんと交流を深め、学びを得て、何事も力にしていきたいと思います。2 年間よろしくお願いいたします。

特集：国際展開

福井大学が主催する EDU-Port プログラム研修に、2025 年 1 月 20 日から 1 週間にわたって、パキスタンから４名、マラウイから３名、ウガンダから３名の大学教授や中学校教員が参加されました。その中で、附属義務教育学校に２日間社会科の授業に参加された際のご感想を、IBA サッカル大学准教授の Al Karim Datoo 様からいただきました。

Learning from Japan

The Sukkur Institute of Business Administration (IBA) university, Assistant Professor

Al Karim Datoo

It was a cold, misty morning as we embarked upon a train from Fukui rail station in Japan to visit Compulsory Education School attached to the Faculty of Education, University of Fukui. The visit was part of an EDU-Port Japan training hosted by the University, whereby educationists from Pakistan, Malawi and Uganda participated.

Our morning train journey was sweetened by a melodious public announcement voice - like a cuckoo singing “Fukui....Fukui.” The melodious whisper instilled a fresh tune of aesthetics, rhythm and harmonious tempo of Japanese life and culture.

At the school entrance, we were asked to take off our shoes and wear the slippers provided. This act dignifies keeping the school’s energy clean from any outside influences. Walking through the corridor, we noticed brooms and cleaning clothes put on stakes, which students utilized for cleaning the school themselves. This daily discipline is an integral part of the education and character building of children. No wonder clean schools are mirrors of a clean and neat society.

The lesson we observed was located within 7th-grade social studies curriculum, and the unit theme was about the African continent.

The teacher employed inquiry-based learning (IBL). This method of learning puts students at the centre where the students lead the inquiry, frame the inquiry questions, investigate, analyze interpret data, and present their findings.

One of the foremost and most important steps in this regard is framing the question of inquiry.

The inquiry question was: What can Uganda and Malawi do to improve the lives of their people?　I was impressed by the framing of the inquiry question. It is worth noticing that the teacher actively interprets the curriculum. This shows that teachers do not think about the delivery of curriculum content only but then interpret the curriculum and turn it into inquiry-based learning where students can engage in researching, analyzing, understanding and sharing their learnings. Thus, curriculum is enacted through interaction between the teacher, subject matter, learners, and the milieu, often known as the four common places of curriculum.

The inquiry question was: What can Uganda and Malawi do to improve the lives of their people? I was impressed by the framing of the inquiry question. It is worth noticing that the teacher actively interprets the curriculum. This shows that teachers do not think about the delivery of curriculum content only but then interpret the curriculum and turn it into inquiry-based learning where students can engage in researching, analyzing, understanding and sharing their learnings. Thus, curriculum is enacted through interaction between the teacher, subject matter, learners, and the milieu, often known as the four common places of curriculum.

The inquiry question was: What can Uganda and Malawi do to improve the lives of their people? I was impressed by the framing of the inquiry question. It is worth noticing that the teacher actively interprets the curriculum. This shows that teachers do not think about the delivery of curriculum content only but then interpret the curriculum and turn it into inquiry-based learning where students can engage in researching, analyzing, understanding and sharing their learnings. Thus, curriculum is enacted through interaction between the teacher, subject matter, learners, and the milieu, often known as the four common places of curriculum.

The second session brought the visiting teachers from Malawi and Uganda to join the students' groups as insider experts. This was an impressive synchronization of the visiting expert's resources with the ongoing learning processes. This reflects situational awareness of the teacher who has a well thought and planned lesson enactment. Impressive!

The students and the visitors on each table discussed and exchanged points of views. This discussion helped clarify and contextualize the information based on which the students further reflected and refined their perspectives.

The subsequent third session further solicited input and reflections from the students and visiting experts. Again, the deliberation helped deepen the students' learning. For example, in one group discussion moved on the issue of poverty moved to the underlying causes like social injustice and corruption that result in usurpation and unequal distribution of resources, oppressing the poor and causing the countries' underdevelopment. This movement of learning from diagnostic to analytical to critical was evident in and through discourse. The session concluded through students offering some recommendations to the set inquiry question, as one student remarked, "we would like to start a child-to-child support program" for the children in Malawi and Uganda. Another student added a critical suggestion, as she asserted, "The natural resources of these countries should be owned by the local people and not overtaken by the foreign companies, so the locals get their due benefits", a very profound point made.

After the session, we collectively reflected in a round table setting. This group reflection included views of the visiting educators, senior professors, student teachers, and international development workers internees. The teacher noted the points and said he will communicate our feedback to the students, who will further revise and finalize their findings for the whole class presentation in the following fourth session.

I was deeply impressed by the level of professional commitment and dedication of the teacher and the collaborators towards the learners and the learning. The process reflected thorough planning, effective design, synchronization of resources, and well-orchestrated expert inputs culminating into a masterpiece of a pedagogic craft.

I realized the power of social studies lessons generated by the committed and professional pedagogue. The 7th-grade learners were learning

about doing development as globally engaged young citizens. The learners were active knowledge co-creators. So much was invested in one learning unit.

It was an “ichi go ichi-e” – once in a lifetime opportune moment to cherish – as the Japanese expression goes, a memorable learning encounter that leaves a lifetime imprint on my mind and heart, and keeps reverberating like a melodious cuckoo’s voice - “bringing thousand visionary hours” ; to quote Wordsworth!

日本からの学び

IBA サッカル大学　准教授　**アル　カリム　ダトー**

寒く霧の立ちこめる朝、私たちは福井駅から電車に乗り、福井大学教育学部附属義務教育学校を訪問しました。この訪問は、福井大学が主催する EDU-Port プログラム研修の一環であり、パキスタン、マラウイ、ウガンダからの教育者たちが参加しました。

朝の電車の旅は、公共アナウンスの美しい声によってさらに心地よいものとなりました。まるでカッコウのように「ふくい…ふくい…」と響き、日本の生活と文化の美しさ、リズム、調和のとれたテンポを感じさせてくれました。

学校の入口では、靴を脱いで用意されたスリッパに履き替えるように求められました。この習慣は、外部からの影響を避け、学校の内なるエネルギーを清らかに保つという象徴的な意味を持っています。廊下を歩くと、掃除用のほうきや雑巾がラックに掛けられており、生徒たちが自ら学校を掃除している様子がうかがえました。この日課は、教育と児童の人格形成における重要な一部です。清潔な学校は、清潔で整った社会の反映であることに納得がいきました。

私たちが見学した授業は、中学 1 年生の社会科の一部で、テーマは「アフリカ大陸」でした。

教師は探究型学習（IBL）を取り入れており、生徒が中心となって探究の問いを立て、調査し、データを分析・解釈し、成果を発表するという学びのスタイルでした。

このプロセスにおいて最も重要なステップの一つは、「問いの設定」です。この授業では、「ウガンダとマラウイは、国民の生活を改善するために何ができるか？」という問いが設定されていました。この問いの設定そのものに感銘を受けました。教師が単なる教科内容の伝達にとどまらず、カリキュラムを解釈し、探究型の学びへと転換していることが明確でした。生徒たちは、調査・分析・理解・共有という一連のプロセスに積極的に取り組んでいました。

このようにして、教師・教科内容・学習者・環境の相互作用、いわゆる「カリキュラムの四要素」を通じてカリキュラムが実践されていました。

最初のセッションでは、教師と生徒が問いを設定し、ウガンダとマラウイに関するウェブ調査を行いました。私たちが見学した第 2 セッションでは、生徒たちはグループごとにホワイトボードを使って初期の調査結果を共有していました。各グループには、ホワイトボード、マーカー、メモ帳、ノートがあり、個々の意見を表現できるようになっていました。

このセッションで特に印象的だったのは、マラウイとウガンダからの教師が「内部の専門家」として各グループに加わったことでした。このように外部リソースを授業に自然に取り入れたことは、教師の計画力と状況判断力の高さを示していました。

各テーブルでは、生徒と来訪者が意見を交換し、情報の背景や文脈について深く理解し合っていました。この議論は、生徒がさらに自分たちの考えを見直し、洗練させる助けとなりました。

続く第 3 セッションでは、生徒と訪問専門家がさらに意見を述べ、学びを深めました。例えば、あるグループでは貧困の話から、社会的不正義や汚職といった根本的な原因に話題が移り、それが資源の不平等な分配や貧困層の抑圧につながり、国家の発展を阻んでいるという分析的・批判的な視点に発展していました。

セッションの締めくくりには、生徒たちが問いに対する提案を出しました。ある生徒は、「マラウイやウガンダの子どもたちのために、子ども同士の支援プログラムを始めたい」と発言し、別の生徒は「これらの国の天然資源は、地元の人々が所有し、外国企業に奪われるべきではない。地元の人々が正当な利益を得るべきだ」と、非常に深い意見を述べていました。

セッション後、私たちは円卓での全体的な振り返りを行いました。この反省会には、訪問教育者、大学教授、教育実習生、国際開発のインターンが参加しました。教師はフィードバックを記録し、生徒たちに伝えて、次の第 4 セッションでプレゼンテーションを完成させると述べていました。

私は教師とその協力者たちの学習者への献身と専門性の高さに深い感銘を受けました。綿密な計画、効果的な設計、リソースの統合、専門家の適切な導入が組み合わさった、まさに教育の芸術とも言える授業でした。

この授業を通して、社会科の学びがいかに力を持つかを改めて実感しました。中学 1 年生の生徒たちが、地球市民として「開発」に取り組んでいたのです。彼らは知識の共同創造者であり、一つの学習ユニットにこれほど多くのものが詰まっていました。

まさに「一期一会」– 一生に一度の、かけがえのない学びの瞬間でした。この日本語の表現の通り、心に深く刻まれる忘れられない経験であり、今もなお、あのカッコウのような美しい声のように心に響き続けています。「千の未来を思い描くひととき」と、ワーズワースの言葉を借りて言いたいと思います。

書籍の紹介

令和 7 年 3 月 21 日福井大学大学院福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科と加賀市教育委員会は新たに連携協定を結びました。この「BE THE PLAYER」は加賀市教育委員会教育長として令和 4 年度から 3 年間赴任された島谷元教育長の力強い挑戦の足跡です。私たちも、これからの加賀市のよりいっそうの発展に寄り添いながら、ともに学んでいきたいと思います。

『BE THE PLAYER』島谷千春（元加賀市教育委員会教育長）著

福井大学連合教職大学院　教授　**小林　真由美**

令和 6 年度末に福井大学と連携協定を結んだ加賀市の島谷千春教育長の在職 3 年間の挑戦です。書籍のタイトル『BE THE PLAYER～自治体丸ごと学びを変える加賀市の挑戦～』にあるとおり、この 3 年間で加賀市の教育は大きく変わりました。たった 3 年間でどのように改革を進めていったのか。何より大事なのは教育長が「BE THE PLAER」であること！という言葉どおり、熱い思いで真摯に教育に向き合ってこられた教育長の姿に、年度のスタート期にあたって、私も「なにか自分で考え自分で動き出そう」とモチベーションを掻き立てられました。

本書は学びを変えるための 5 つのデザイン戦略から章が構成されています。

印象的な「BE THE PLAYER」のスローガンに象徴されるようにビジョンを掲げることの大切さを語った第 1 章の「ビジョンデザイン」。その中の 4 つのプロジェクト「学びを変える」「誰一人取り残さない」「未来は自分で創る」「地域と一緒に」は加賀市だけでなく、まさに学校づくり、そして学級づくりの重要ポイントです。

第 2 章は「コミュニケーションデザイン」。先生や学校とのコミュニケーションをどう紡いできたのか。「島谷のつぶやき」と題した月 1 回のラブレターは、「学校便り」であり「学級通信」です。教育長のリーダーシップの在り方はこれからの組織にとって大きな示唆となります。

第 3 章では学びの改革に大きくつながる「教員研修デザイン」。福井大学教職大学院でも我々が近年大切にしている「子どもの学びと大人の学びは相似形」が示されており、その学びには「対話」が重要であるという真髄が語られています。

第 4 章は「授業デザイン・学びの空間デザイン」。いわゆる「自由進度学習」にトライしてきた加賀市ですが、決してその方法ではなく、その奥にある「誰一人取り残さない」という願いに基づいた本質を語っています。

最後は「広報・PR デザイン」。保護者をはじめ先生方からも多くの信頼と安心感を得るためには、やろうとしていることをどう伝えていくかが重要です。それは、学校、学級を作っていく際にも同じこと。この章だけでなく全編にわたって、この一冊が、加賀市の教育の改革のみならず、学校改革、授業改革そして私たち自身の教育観の改革につながっていることに気づかされます。

「よりよくなろうとして変わり続けること」これが子どもたちの「今」と「未来」に真正面から誠実に向き合うことだと思っています。

と締めくくられたこの一冊。夢中になって一気に読み切った私に、挑戦への勇気を与えてくれた気がしています。ぜひ、ご一読いただきその改革の歩みをたどりながら、皆様も新たなエネルギーをもらってください。

令和６年度 長期実践研究報告　一覧

令和６年度の修了生が作成した、長期実践研究報告の一覧です。

号	氏名	タイトル サブタイトル
授業研究・教職専門性開発コース		
617	笈田　峻汰	「Re」でたどる授業観
618	帶川　夏穏	自分で自分を育てる力 省察的実践を通じた教育観の探究
619	金田　潤之介	子どもに寄り添う ～子どもが育つために～
620	黒瀬　玲凱	変わらないままに変わるもの 授業・生徒・院生集団に映る私の求め
621	酒井　俊典	私の見つけた”探究の途” 学ぶこと、探究すること、伴走すること
622	酒井　夏瑞	旅路 3年間の観の変容を辿る
623	櫻井　翼	つながりの中で生まれた現在地 「他」との関わりを通して「本質」を探る
624	笹本　穣太郎	子どもと共に歩む ～生徒と向き合うための「係わり」とは～
625	杉本　彩綺	生徒の成長を支える教師を目指して
626	伊達　あさひ	ふとした瞬間、気づいた変化
627	長谷部　瑞季	立体的に広がる視点 インターンを通じて実感した自らの変容
628	松河　圭亮	教師として「予見」する
629	松田　美穂子	将来につながる学びを目指して 良い授業とは何なのか
630	村上　瑠菜	子どもの持っている力を生かす 「コミュニケーション」の拡がりに着目して
631	山本　晃永	「教育」への挑戦 理論と実践の往還を通しての学び
632	劉　靖宇	生きた授業の創造 グループ活動・ICTの活用・発問・ルーブリックから考える
633	渡辺　昇希	描き続ける教師としての私 ～問いに出会い自分なりの答えを探し続ける3年間～
634	和藤　隼生	他力本願で歩んできた人生の省察 後悔しない人生に向けて少しずつ自分で考えること
ミドルリーダー養成コース		
635	Wolff Shana Marie	Tell me a Story Students and teachers as participant-learners through a storytelling approach
636	浅井　綾子	子どもと共に学びながら 見えてきた課題

号	氏名	タイトル サブタイトル
ミドルリーダー養成コース		
637	東　永見	私は、どう生きていきたいのか
638	儀間　裕勝	島の子どもと教師の探究の歩み 子どもの見取りと対話
639	号刀　悠貴	あなたと働きたい 教師として進み続けるために
640	澤田　更紗	対話を通して学びの本質を問う
641	Santamaria Juan Florencio	Generational Learning as Reflected in the Eyes of a Boy Looking at the Sky An ALT's Tale
642	宍戸　佳央理	わたしの中にある教師としての「声」を探して 語り合うことから紡いでいく
643	高橋　美幡	見えない価値 学校図書館の意義を"空間"から考える
644	Hartford Lauren Nichole	The Academic's Journey The Odyssey of Learning: Evolving as Educator and Learner
645	前川　尚代	子どもと共に学び創る 「響け！輝け！心のハーモニー」
646	松田　奈々	剛から柔へ、教育観の変遷 ～教育に携わる者になる意識の芽生えと生長の兆し～
647	山田　ゆみ	子どもが主体性を発揮する教師の関わり 教師が変われば子どもが変わる
学校改革マネジメントコース		
648	石川　秀和	生徒・保護者と共に学び合い、歩む学校づくり 学びをひらくとても小さな一歩を踏み出してみて
649	石田　洋志	学び続ける教師が挑む学校改革 ～教師としてあるべき姿を問い直し続ける先に見えるもの～
650	犬塚　晶子	学校組織における教師の探求 自己実現に向けた責任ある意思決定のための探求
651	今井　良昌	子どもとともに育つ教師となるために 学習観・教師観を見つめ直すとともに，持続可能な実践コミュニティづくりを実践した連合教職大学院での学び
652	金澤　敏文	「しなやか」な専門学校づくり 管理職の流儀
653	川﨑　美和	子どもと教師の学び合うコミュニティづくり mustからwillへ
654	川田　奈津子	実践からの問いと対話がつなぐ教師の省察
655	栗原　宗則	「子ども中心の授業」を実現するための校内研究のデザイン
656	齋藤　英市	つながりの構築でみんなが輝く学校づくり ～学び続ける教師コミュニティづくりとＥＳＤの実践から～
657	坂口　明美	エージェンシーを育む学校経営 授業改革を核とした学校改革を通して
658	佐藤　義信	自らの気づきを促すために ～語る、聴く､問う、つながる対話を目指して～
659	高尾　和人	園よ、変われ 一人一人を大切にした組織づくりを考える
660	橘　慶成	Well-being の実現に向けた学校改革 デジタル化とコミュニティと未来の教育に向けて

号	氏名	タイトル サブタイトル
学校改革マネジメントコース		
661	出口　津代子	組織改革は、自分改革 ～過去と今をつなぐ「省察」からの気づきを、未来へ～
662	中川　恵一	人間万事塞翁が馬 未来を切り拓く言葉の力と可能性
663	丹羽　正昇	学校教育がもつ本質的な価値 出会いと響き合いが人の成長を促し、新しい学びを生み出す原動力になる
664	平岡　栄一	組織を活性化させる熱意 各自のかけがえのない良さをどのように発揮していただくか
665	平中　理恵	学び続ける教師、学び続ける学校 校内研究を核とした教師の学びづくりの取組
666	前　幸三	共感を伴う省察による教師としての育ち
667	増田　善宏	自分が変わらなければ学校は変わらない 「出会い」を通した学校改革への挑戦
668	松山　奈美江	教育観の転換 ミドルリーダー、指導主事として学校改革をマネジメントする
669	三上　勝	「学び」をアップデートする 過去から現在、そして未来へ
670	目見田　紋未	研修担当者の「学びあいのコミュニティ」 「研修観の転換」に向けた協働を目指して
671	山腰　浩樹	いとを編み語る 人・ストーリー・自分・経験をつなげる
672	山田　泰子	主体的・協働的に学び合うために 合唱活動から派生した学び合いの環
673	山本　幹也	学校改善と学校観の変化 校種間異動と閉校イベントを通して
674	吉田　仁一郎	多様なコミュニティを通した試み 学校の中と外の視点から

公開研究会 等

関 係 各 位

令和7年2月吉日

福井大学教育学部附属幼稚園長・義務教育学校長
牧田　秀昭
公益財団法人 ソニー教育財団 理事長
盛田　陽一
ソニー科学教育研究会(SSTA) 理事長
鈴木　華奈子

第１次案内

ソニー子ども科学教育プログラム
２０２４年度
最優秀校
子ども科学教育研究全国大会

福井大学教育学部
附属義務教育学校
(附属幼稚園も同時開催)
令和７年度 教育研究集会

令和７年６月１３日（金）　8:20－16:30

会場：福井大学教育学部附属幼稚園、義務教育学校

義務教育学校研究主題（第II期）

「探究し協創するコミュニティ」

義務教育学校研究副題（２年次）

「学びを共に繰り上げるプロセスをデザインする」

詳細は、４月下旬発送予定の第２次案内にてお伝えいたします。

授業公開

幼稚園での遊びや前期課程と後期課程での各教科の探究的な学びを公開します。子供の学びについて共に語り合いましょう。

幼稚園の遊び

前期課程の学び

後期課程の学び

シンポジウム

学習院大学　秋田喜代美氏、慶應義塾大学　鹿毛雅治氏、
千葉大学　山下修一氏にシンポジストとしてお越しいただきます。

学習院大学
秋田　喜代美　氏

慶應義塾大学
鹿毛　雅治　氏

千葉大学
山下　修一　氏

○幼稚園・義務教育との接続に興味がある方
○授業実践を語り合い、教育全般および専門教科の実践力を高めたい方
○プロジェクト型学習や探究的な学びに興味・関心がある方
○近年の教育改革などの教育情勢の動向について興味・関心がある方

ご挨拶

皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。さて、本校は令和6年度「ソニー子ども科学教育プログラム」において、「最優秀校」に選ばれ、「子ども科学教育研究全国大会」を開催させていただく運びとなりました。また、隣接の附属幼稚園は令和5年度「ソニー幼児教育支援プログラム」において「最優秀園」に選ばれており、本校園として2年連続での受賞を大変光栄に存じます。

本校は、幼稚園の遊びからつながる12年間の「探究的な学び」に、理科教育だけでなく全ての教育活動で取り組んでいます。当日は、学びを協創する子供と教師の姿を全国の多くの皆様にご覧いただき、ご指導・ご助言を賜りますようお願い申し上げます。

福井大学教育学部附属幼稚園長・義務教育学校長
牧田 秀昭

ACCESS

所在地
福井大学教育学部附属幼稚園
福井大学教育学部附属義務教育学校

〒910-0015
福井県福井市二の宮４丁目４５番１号
【幼稚園】　0776-22-6687
【前期課程】　0776-22-6891
【後期課程】　0776-22-6985

https://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzoku-g/about/access/

会場までのアクセスは
上記のQRコードまたはURLより接続される本校HPにてご確認ください。

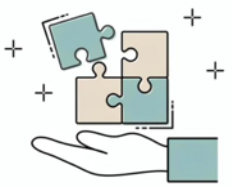
お問い合わせ先

福井大学教育学部附属義務教育学校　担当：森川
0776-22-6985　0776-22-6703

Schedule

4/19,20 Sat. Sun.	4月月間合同カンファレンス **A** 日程
4/26,27 Sat. Sun.	4月月間合同カンファレンス **B** 日程
5/13 Tue.	運営協議会（オンライン）
5/17 Sat.	5月月間合同カンファレンス **A** 日程
5/24 Sat.	5月月間合同カンファレンス（東京会場のみ）
5/31 Sat.	5月月間合同カンファレンス **B** 日程
7/5,6 Sat. Sun.	実践研究福井ラウンドテーブル **2025 Summer Sessions**
7/12 Sat.	7月月間合同カンファレンス **A** 日程
7/19 Sat.	7月月間合同カンファレンス **B** 日程
7～8 月	夏期集中講座 **Cycle1(a:7/26.27.28), (b:7/29,30,31)** **Cycle2(a:8/2,3,4), (b:8/5,6,7)** **Cycle3(a:8/9,10,11), (b:8/18,19,20)**

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。



【 編集後記 】

本号では、授業研究・教職専門性開発コースの院生、新任スタッフからの熱い抱負が寄せられました。また、国際展開の一つとして、EDU-Port 参加者の声を掲載しています。連合教職大学院では 2025 年度もまた、多様な地域と連携・協働しながら重層的なコミュニティを形成していきたいと考えています。そして、読み手の皆様と共によりよい Newsletter を作っていきたいと思います。

（2025 年度 Newsletter 担当一同）

教職大学院 Newsletter No.194

2025.5.2 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院
福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp